屋根の上の恋人たち

ATS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屋根の上の恋人たち

【Ｎコード】
Ｎ４６６６Ｄ

【作者名】
ＡＴＳ

【あらすじ】
女子高生である冴子は、授業中に居眠りをする程の健康優良児。その日も心地よい春の陽気に誘われて、腕を枕に熟睡中だったのだが、それが原因で大変な事に巻き込まれてしまう！！人違いによって上の世界に逝く事になった時、さあ冴子は行動を開始した。意地っ張りで行動派の冴子が繰り広げる、トラブルはちゃめちゃラブコメディー！

前編：あなたは死神の存在を信じますか？（前書き）

この小説は、ライトノベルにカテゴライズされるラブコメディーです。ライトノベルやラブコメに嫌悪感をもたれる方はご注意下さい。

前編：あなたは死神の存在を信じますか？

「じ、地獄の様だわ」

この時期になると冴子は、必ずそう思わされる。

いい加減古くさくなってきている四階建ての校舎、二階の一番奥に位置する教室。窓際の最後尾に冴子の席があった。

季節は春――――うららかな陽気がとても心地良い季節である……とは言っても、それが全ての人に歓迎されるモノとは限らない。

特に、現在授業を受けている冴子に取っては、「凶器」と言う形容詞がぴったりと当てはまるものだろう。

そう、睡魔という凶器である。

何せ冴子のいる教室は校舎の南側に面しており、うららかな陽気と共に心地よいそよ風が吹き込んでくると言う、絶好の位置にあるのだ。

季節は春、校庭をぐるりと囲むように咲いている桜が、見る者に絶対的な睡魔を提供するのは言うまでもない。

しかも悪いことに、今現在冴子が受けている授業は、別名『安眠先生』と恐れられている安見教師の古典だった。

なぜ安眠先生と言われているかって？

それは、ゆっくりとしてマイペースな語り口の安見から発せられる、意味不明（に感じられる）言葉が、まさに天使の子守歌か悪魔のささやきか……強烈な眠気を催す呪文の様だからである。

タダでさえ春の凶器に打ちのめされているのに、これ程厳しい条件が重なれば、たまったモノではない。いくら強靱な精神の持ち主でも、睡魔を追い払うのは至難の技であった。

現に殆どの生徒は、いかにして眠気を払おうかと四苦八苦している状態で、安全ピンを用意する強者もいるくらいだった。

よって、後方で、しかも窓際の席にいる冴子が『地獄の様だ』と思うのは、仕方が無いのである……

「そう、だけど私は別に寝ている訳じゃないの……ただちょっと、まぶたさんが休憩したいって言うから、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけまぶたさんを休ませてあげているの……」

と、かなりメルヘンチックな言い訳をしながらも、もちろん、冴子は腕を枕にして深い眠りの中へと落ちていた。

よだれを垂らしていないのが唯一の救いであるのだが、顔には既に、寝皺がつきつつあって、名前の「冴」とはだいぶ異なっていた。

しかし、そんな冴子の名誉の為に言っておくが、冴子自身は勉強も……そこそこには出来るし、たとえ今は寝皺でひどい状況になっていても、けっして顔そのものが……ひどい訳では無い。

美人と言うタイプでは無かった———もっとも当人はスッキリとした美人顔だ！と思っているらしい———が、なかなか可愛らしい顔付きをしており、明るい性格も手伝って、男女ともに人気がある。

ただし、明るすぎるのがたまに傷という話もあるのだが……

身長は１６０ｃｍと、最近の女子高生としては平均的な高さ。スリーサイズは本人の承諾が無いので伏せておくが、別に太っている訳でもやせぎすで骨張っている訳でも無く、ごくごく平均的な容姿をしている。

さて、大体冴子の説明が終わったところで、もう一度教室の方へ目を向けてみると、相変わらず春の凶器や安見氏の呪文に必死に耐えている者、または戦わずして負けているものが半々と言った感じで、とても他人の事など気にする余裕は無い。

とは言え授業の続く中、冴子の横に背広を着た男が立っている事

に、周囲の誰もが気が付かない状況と言うのは考えられるのだろうか？
そう、授業をしている安見でさえ、その男の存在に気が付かなかったのである。

「桂木さん」
「んぅ」
「すいません」
「はぅん」
「あのぉ～」
「もう食べれないってば……」
本人は否定するかも知れないが、冴子は春の凶器によって完全に夢の中へとたたき落とされていて、男の呼びかけにも全く気が付く様子はない。
「もしも～し、起きてくださいよ～」
ユサユサ……ツンツン
男は、いくら呼びかけても起きる様子を見せない冴子に、肩を揺すったり指で頬をつついたりと……色々な事を試すのだが、しかし、それでも冴子は目を覚まさない。
「はぁ～ここまでやって起きない人も、珍しいですね～」
男はそんな冴子に、あきらめのため息をついた。
そして「仕方がないですね～」と、妙に間延びするしゃべり方で、一人、納得した表情になると、今度は背後に手を回し、何やら棒の様なモノを取り出し始めた。

スルスルスル――と、どこにしまい込んでいたのか、取りだしている棒の様なモノはドンドンと伸びて行く。
スルスルスル――と、背後から取り出した棒は、最終的に男の身長程にもなっていた。
しかもよく見ると、棒だと思っていたモノの先には、三日月状に

反り、鋭く、そして鈍く光りを放つ鉄の刃が付いていた。
そうそれは、まるでおとぎ話に出てくる死神が必ず手にしている様な、大きな鎌だった。

男は、未だ授業の続く中で、大きな鎌を両手で持って冴子の隣に立った。
だが、それでも誰一人、この男に気が付く者は居ない。
いくら春の凶器と安見の呪文にさらされているとは言え、大きな鎌を持つ背広姿の男に、周囲の生徒はおろか、教師の安見ですら気が付かないのは異常としか言いようがない。
しかしその男は、そんな周囲の状況がさも当然と言った感じで気に止める様子もなかった。
「ふぅ〜、本当はキチンと確認したかったけど時間が時間だし……事後承諾と言う事で〜」と一人つぶやくと、大きな鎌を冴子に向かって構えだした。

振り下ろす先には当然、冴子の『首』があって、このまま行けば間違い無く猟奇的殺人現場のできあがりと言う状況、果たしてこの男、怪奇映画の見過ぎで現実と幻の境が解らなくなった異常者なのだろうか？
いや、背広姿の男はどこかの普通の営業マン程度にしか見えない。それもうだつの上がらない、成績の振るわない営業マンだ。
その成績の悪い営業マン、外見は本当に普通の男で、何処から見てもぼろぼろのマントを付けた骨だけの死に神と言う訳でもなし、髪の毛も、後ろの毛に寝癖が付いてはいたが、小綺麗にカットされていてサラリーマン然としている。
顔は寝不足なのか、ぱっとしていなかったが、やはり極々平均的な冴えない男である―――そう、鎌さえ持っていなければの話だが。
しかし現実に、男は鎌を持って冴子に向かって構えている。そして冴子は、未だに夢の中を漂っているのか、そんな事など全く気が

付かない。
このままでいけば、まず間違いなく男のなすがままになってしまうだろう。

男はそれも見越しているのか「よっこらしょ」と、いささか格好悪い掛け声を出すと、俄然、冴子の首を狙って大きな鎌を構え直した。

「じゃ、逝きますよ〜」

男は、ここでも緊張感の無い間延びした口調で呟くと、鎌を握る手に力を入た。男の身の丈ほどもある鎌は結構な質量があるのか、たまにふらつきながらもねらいを定めている。
そして———男はねらいを定めたのか、もう一度、鎌をギュッと握り締め剣道の上段の構えを取って気合いを入れたかと思うと、気合いの声と共に、その凶器を冴子の首へと振り下ろした。

えい！

ブン———短い気合いの声と共に振り下ろされた鎌は、鈍く風を切る音を立てると、鋭い一撃を、冴子の首へと突き立てていた。

瞬間、鋭い鎌の一撃はその首をやすやす刎ねあげると、主の無くなった冴子の身体からは、噴水の如く血しぶきが上がり、一瞬にして教室の中は阿鼻叫喚の地獄絵図へと……

……

……

――――変わることは無かった。

どうしたのだろう？男は失敗したのだろうか？

いや違う、実はその男、冴子の「首」を狙ったのでは無く、頭の直ぐ上をかすめる様に鎌を振り下ろしていたのである。

よって、当然のごとく何も起きようが無いのだが……変化は直ぐに現れてきた。

男が鎌を振り下ろして少しすると、徐々に、周囲の空気が冴子に向かって吸い込まれる様に渦を巻きだしたのだ。

ゴゴゴゴゴ！！――――その渦は空気を吸い込む異様な音と共に、徐々に、大きさを増す。まさに竜巻だ。

そして、徐々に大きさを増した空気の渦が、とうとう冴子の体を飲み込む様になったと思った瞬間、その渦の中からもの凄い勢いでもう一つの竜巻が飛び出した。

バン――――

勢い良く飛び出した竜巻は、不気味な音を立てて宙に舞った――――と思ったら、一瞬にして空気の渦は何事も無かったかのように収まりはじめた。

すると、冴子の身体から飛び出してきたもう一つの竜巻も、徐々にその空気の渦が収まりを見せ始め、空気の渦に隠れていて見えなかったそれが、姿を現しはじめた。

そうそれは――――もう一人の冴子だった。

冴子の体が二つに分かれ、片方が宙に浮いていたのである。

「ふう、これで起きてくれるでしょう～」

男は宙に浮く冴子をみて、ほっと胸をなで下ろした……ハズだった。が、

スヤスヤ――――

「って、　か、桂木さん？」

ま、まだ寝てる……

冴子は未だ、春の凶器に打ちのめされたままだった。

竜巻が二つに分かれた瞬間は、まさに弾丸のようなもの凄い勢いで飛び出し、周囲にその余波を振りまくほどの衝撃であったのにもかぎらわず、余程深い眠りに陥っていたのか、未だ冴子は目を覚まそうとしなかった。

し、しぶといですね――――男はそんな冴子を見てどうしようかと頭を悩ませた。

いくら図太い神経の持ち主でも、あれ程の衝撃があれば目を覚ますだろうと高をくくっていたのだが……ところがである、目の前の少女は、『それしきの事で私の眠りを妨げる事が出来るの？』と言わんばかりに爆睡してて、男は、どうして良いのか分からなくなった。

一瞬、このまま放置して帰ってしまおうかとも思った――――が、しかし、その男には、どうしても冴子に目を覚ましてもらわねばならない理由があり、ここで引き下がる訳にはいかない。

あれほどの衝撃で目を覚まさないなんて、なんて図太い神経の持ち主なんでしょうか。とは言えこのままにして置くわけにも行かないし……体を揺すった程度では起きそうもない。けれど、案外そう言う人に限って、言葉の方が聞くかも知れませんね――――

男は思うやいなや、早速冴子に向かって呼びかけを始めてみた。

「冴子さん～美味しい焼き肉があなたを待ってますよ～」
……ある意味、男は冴子の性格を見透かしていたのかも知れない。
「ケーキに大福、プリンにホットケーキにクレープにあんマンに……」
思いつくだけの食べ物の名前を、冴子の耳元でささやき始めた。
「う、う～ん……」
するとどうだろう、少しだったが、冴子から反応が返ってきた。
これは、これはいけますよ！！――――男は希望が持てたのか、更に食べ物の名前をささやいた。
「うに、トロ、いくら、鮭にネギトロ、アサリに……」
今度は寿司ネタだった。

「うぅん……もぅ、食べられ……てば……」

冴子の顔に、これ以上ないと言った幸せそうな表情が浮かんだ。
後もう少しだ！――――男はここぞとばかり、大きな声で冴子を呼んだ。

「冴子さん！！起きてください！！」
「うう……うっさい……わね」

途中……が入ったのは、大きな欠伸で遮られたからだが、男は、とうとう冴子を起こす事に成功した。
とても彼氏には見せられない顔をしていたが、冴子が、何とか目を覚ましたのである。

「いやぁ～良かったです～、やっと起きられましたね～」
男は冴子がようやく起きたのを見ると、妙に間延びした特徴のある口調で話しだした。
「いやぁ～実際ですね～、たまにいるんですよ～夢の中でも寝てる

ってゆ～奇特な方がぁ～」

……誰？

冴子は目の前の男に見覚えが無かった。新しい教師かしら……でもやすみん（安見教師のあだ名）のお経が続いているって事は、まだ授業中みたいだけど　……それに、こんな風に空中に浮いてる状態なんて……やっぱり夢よね……

冴子の体は、あれからまだ、空中に浮いたままだった。

いやね……あるのよね、こう、夢の中で夢を見るって言うの？それで自分の寝てる姿とかも見えたりして……ま、そんな事はどうでも良いとしてとにかく私は眠いのよね……

「と言うことで、お休みなさい」

自分の中で折り合いが付いたのか、冴子は目の前で色々としゃべり続けている男を無視し、もう一度、春の凶器へと身をゆだねようとした。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ～冴子さ～ん。何が『と言うこと』なんですか～」

男は、今度冴子が眠りに落ちたら、もう二度と目を覚まさないと思ったのか、寝かしてなるモノかとまたもや間延びする口調で冴子の体を揺さぶった。

「何……よ私の夢のくせして、この私の睡眠を……邪魔するって言うの？」

冴子は何度か欠伸を挟みながら、自らの眠りを邪魔する目の前の男に怪しげな視線を向けた。

「うっ……なんか嫌な予感」

男はそんな冴子に、イヤな予感を感じたのだが……その時は既に遅かった。

冴子が「天罰テキメン！！」と言う掛け声と共に、男の股間を思いっきり蹴り上げていたのである。

――――ぼぐぅ！！！

「はぅぁ」

瞬間、なにやら鈍い音と共に、男の断末魔の様なうめき声が聞こえたが……

――――人事不省である。

男の頭の中では、過去の出来事が、まるでメリーゴーランドの木馬の様にグルグルと走り回っていた。見てはいけないモノが次々と浮かんでは、苦痛によって消えて行いった。

「ぞ、ぞうが、ごれがぞうまどうってやづだ」

訳：そ、そうか、これが走馬燈ってやつだ

その男が滅多に見られない（見たくない）走馬燈を経験している時、冴子は、例の『モノ』を蹴り上げた感触からか、何となく眠気と言うものがなくなってしまった。

「ふぁ～あ、全く嫌な夢ね。夢の分際で私の眠りを妨げるなんて……って、あらら？」

冴子は伸びをしながら大きく欠伸をすると、目の前で背中を丸めてうずくまっている男に気が付いた。そして、自分がナニに何をした事などつゆ知らず、うずくまっている男に声を掛けていた。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

「って！　死んだらどうするんですか！！」

冴子が寝ぼけていたからか、幸いにして蹴る力がそれ程でもなかったらしい。　男は何とかあの世行きを免れた……とは言え、筆舌

に値する痛みだった事は言うまでもない。
男はこれまで経験した事の無い程の痛みに、脂汗をダラダラとたらしながら、全く平気な顔をしている冴子に対して抗議の声を挙げた。

「男に取って、男に取ってどれ程苦しいか……解ってるんですか！！女の子になっちゃうじゃないですか」
男は四つんばいになって、右手で腰のあたりを叩きながら涙声だった。
しかし、先程まで寝ぼけていた冴子としては、イキナリ怒られても訳が分からない。
どうして私が怒られなきゃならないの？――と、男の理不尽な怒りに反論しようと思った……が、しかし、その時改めて気が付いたのである。
そう、自分がフワフワと空中に浮かんでいることを。

「あら、あらら、ヤダちょっと、なんで私が空中に浮いてるの！？」
自分の下には見慣れたクラスメート達はおろか、自分の姿さえもある。
先程は寝ぼけていたせいもあって、あまりよく覚えていなかったのだが、今はその眠気も去って現状を確かめる余裕があった。
ヤダ、私ってまだ眠っているんだ……さっきもそうだったけど、体が空中に浮いているなんて夢の中以外に考えられないじゃない。でも、それにしてはさっき、何かを蹴る感覚があったけど……
「や～っと気が付いてくれましたか？　桂木さ～ん」
空中にフワフワと浮きながら戸惑い顔をしている冴子を見て、男は説明するには今しかない――と、ここぞとばかりに話しを切り出す事にした。
「や～っと、あなたの立場を理解してくれましたか～」
「ええ気が付いたわ。私がまだ眠っているって事が」

冴子でなくともそう思っただろう。自分がフワフワと空中に浮いていて、下には自分の体と、今まで受けていた古典の授業が続いているのを見れば。

「いや、そうじゃなくてですね～桂木さん。あなたは今日、この時間に死ぬ運命だったんです～。で、もう死んでるんですけどね～。ついでに私も死にかけましたけど……」

男は余程堪えたのか、少しばかりの皮肉を加えつつ現状を説明した。もっとも、今の冴子には、そんな皮肉やジョークなどに気が付く余裕は無かったのであるが。

イキナリ「あなたは既に死んでいます」と言われば、そんな些細なことに気付くハズがない。

案の定、冴子の頭は、現状を把握出来ずに混乱していた。

昔どっかの漫画であったっけ「お前は既に死んでいる」なんて台詞の後、イキナリ、ドバーと血を吹きながら悪者が倒れたり……でも私、別に悪い事なんてしてないし。

大体なんなのよこの男、この私が死んでるですって？……そう、やっぱり夢なのよね。だって私は全然健康だったし、第一今まで授業を受けてたのよ、車に轢かれたって訳でも無いし、机にうつぶして居眠りしていただけでなんで死ななくちゃならないのよ。

そうよ、なんかの発作を起こしたって訳でもないのに、イキナリ死ぬなんて有るわけないじゃない。

もしかしたら、私が美人だからって、美女に付き物の持病を気づかずに持っていたとでも言うの？そして、それがイキナリ発病して突然死んでしまったとか　……冴子は少々？図々しい事を考えていたが「いいえ、でも……」と、未だ信じられないと言ったように考え込んでいた。

しかし、元々考えるよりは行動が先に立つ冴子は、今も、考えるのがだんだん馬鹿らしくなってきた。そして、「やっぱり夢ね」と、ごく普通の結論に達するのだった。

それもそうだ、誰が見ても冴子は、授業中に居眠りをするほど正常な？健康優良児であり、口の悪い友人からは「冴子は殺しても絶対に死なないタイプよね　……」などと言われる元気者なのだから。

しかし、そんな冴子に対して「あのですね～、死んだ直後はみなさんそう思われるのですよ。でも安心してくださいね、完璧に死んでますから」と、死んで安心も無いのだが、この一見サラリーマン風の男は真面目な顔で言った。

「だだだ、だって、どう考えたっておかしいじゃない。私まだ17才の高校2年生よ！持病だって持ってなかったし、健康診断だって異常は無かったのよ！それどころかクラスの友達からは『冴子は元気過ぎるから少しくらい血を抜いた方が良いんじゃない』とか言われて腹が立ったくらいだし、それにまだ私のおばあちゃんだって生きてるし、うちの飼い猫のクリッパーだって生きてて、やっぱり秩序を重んじる日本人に生まれたからには順序ってもんがある訳で、順番的には私はまだまだ後の方だと思うし……って、これはあんまり関係ないかも知れないけど。とにかく、私がなんで死ななくちゃならないのよ！！」

と、冴子は目の前の男の首を絞めながら、一気にしゃべりまくっていた。

「うぐぐっ、ざえござん、ギブギブ」

男が今日2度目の走馬燈を経験したのは言うまでもない。

「大体、あんたは一体何者なのよ。まさか死神なんて言ったらお笑いよね。いくら夢とは言え、死神と言えば黒いマントを深くかぶって、フードの中からは肉の無い無機質な感じの骸骨がのぞいてて、くぼんだ両目の部分にはろうそくの炎の様に鈍い光が二つ光ってるじゃない？こんな冴えないサラリーマン氏が死神だったら、夢の中

とは言え私のイマジネーションが欠落しているって証拠よね。ははは……」
自分でも何を言ってるのか解らなくなり、冴子は力無く笑った。
「ぞ、ぞのまべに、で、でをばなじでぐだざい」
訳：そ、その前に、手、手を離しでください

冴子は、男の言葉で初めて自分が相手の首を絞めながら話している事に気がついた。
「あ、あら……ごめんなさい」
「は～っは～っ、一日に二度も死にかけた事なんてありませんよ～。全く、死んでからも元気な方って珍しいですね～」
冴子が漸くその手を離すと、男は締め付けられた首をさすりながら安堵の息をもらした。
「で？」
「ひぃ！　や、やめてくださいよ、その怖い顔は」
「顔の事なんかどうでも良いじゃない！」
「は、はい～」
「で、一体あんたは何者なのよ！！」
冴子はとても彼氏には見せられない様な恐ろしい顔で、その男に詰め寄っていた。もっとも、つき合っている彼氏などいなかったのだが……それにしても、怖い顔には違い無い。
男はそんな冴子に身の危険を感じつつ、スーツの内ポケットから一枚の名刺を取り出すと「え、ええ、私こういう者です」と、恐る恐る手渡した。

その名刺には
『死神協会東京支部第一執行部――――竹田泰三』と、印刷されていた。

……

「何よ！このふざけた名刺は！！」

冴子が叫んだことは、言うまでも無かった。

「ひぃ～、だからその怖い顔はやめてくださいよ」と、自称死神を名乗る竹田泰三氏は、先程の一撃が余程堪えたのか、股間を押さえながら顔を引きつらせていた。

「失礼ね！こんな美人を捕まえて」

「ひぃ！　わ、解りましたから……ううっ怖い」

「大体何よ、この死神協会東京支部って。人を馬鹿にしてるわ！」

「だ、だってしょうがないじゃ無いですか、神様が決めたんですから」

「神様って……はぁ～？」

冴子は額に手を当てながら、天を仰いだ。

「と、とにかくですね～桂木さん。私は寿命の尽きた方をお迎えにあがるのが仕事なんですよ～。そ、それでですね、生憎ですが～今日のこの時間に、あなたをお迎えに来たと言う訳なんです」

「……で？」

「はい？」

「それで？」

「はい？？」

「だからどうして私は死んだのよ」

「ええ、ですから寿命で……」

「って、そうじゃないわよ！死因よ死因！！寿命って年じゃ無いじゃない！！」

「ひぃ！だ、だからその怖い顔は……ひぃ！ええっとですね、ここに死亡確認書があるんで、詳しくはそれを見てください」

冴子の形相に、竹田氏は身をすぼめながら一枚の紙を取りだした。

「本当はですね、執行の前に本人に確認して貰って、書類にサインを頂きたかったんですけど……そ、その、冴子さんがお疲れの様子でしたので」
冴子は鬱陶しく説明する竹田をジロリと睨むと、渡された紙に目を通した。

桂木冴子－１０７才
○×年○×月○×日○×市○×の場所に於いて、天寿を全うした事により、ここに召還す。
執行人：死神協会東京支部第一執行部　竹田泰三

紙にはそれ程多くの事は書かれて無かった。
これだけ？もっと劇的な理由があるのかと思ったのに――――冴子はその紙を見て気が抜けてしまった。きっと想像も付かない様な複雑な理由が隠されていて、その運命には逆らえずに死んでしまったのでは無いか？と、密かに思ったのだ。
案外、人が死ぬ理由など簡単な事なのね――――冴子は、この突然の出来事に、既に何も考える気力が無くなっていた。

「そ、それではですね、一番下のところにお名前を頂けますか？」
竹田泰三は、そんな冴子に、まるでどこかの営業マンの様に手もみでもしそうな低姿勢で言った。
「そう……」
と、冴子は上の空で答えると、竹田が差し出したペンを素直に受け取った。
もう、何がなんだか理解を超えていて、抵抗する気持ちも浮かばなかったのである。

そして冴子は、竹田に言われるまま、死亡確認書に自分の名前を書き込んだ。

葛木冴子――と。

「は～これで一仕事終わりです～。それでは天国へと案内させていただきますので～、桂木さんはご安心して下さいませ～」

は～素直にサインしてくれて良かったですね～

もう一波乱あるのでは？と思っていた竹田は、案外あっさりとサインをした冴子に安心した。

……が、その時変化は現れた。

「ん？」

「いや～以外と上の世界も良いものですよ～」

「ねえ」

「若いウチに上の世界に逝くとですね～」

「ちょっと」

「はい？」

竹田はどこか怪しげな雰囲気の冴子に、小さな不安がわき上がる。

「これ……この書類の名前、かつらの木って書いて桂木になってるわよね……」

「ええ～っと、そうですね」

「私……」

「はい？」

「私の名前は、くずの木と書いて葛木って言うのよね……」

「は、はぁ～」

「それに、私１０７才じゃなくて、１７才なのよ……」

冴子は震える手で書類を眺めていたが、それを竹田泰三の顔の前に付きだした。

「人違い……なんて言ったら、解ってるわよね」

――――！！

竹田はそれを確認すると、自分の体内に流れている血液が、一気

に引いていくのが分かった。
明らかに、人違いなのである。
目の前に突き出された紙が、ゆっくりと下がると、そこには、今までで一番恐ろしい冴子の顔があった。
「ひ！ひぃ～！！！！！！」
「あんたが逝って来なさい！！！」
竹田泰三に何が起きたのか――――ひとまず目をそらした方がよさそうだった。

同時刻：桂木冴子（１０７才）宅では――――

「それにしても……いつ逝っても良いハズなんだが……」
「そう……ですね、先生」
「持ち直してる訳でも無いし……」
「不思議……ですね、先生」
「う～む」
親戚一同が顔をそろえる中、医者と看護婦は冴子の脈を不思議そうに診るのだった。

中編：あなたは神様の存在を信じますか？

「はぁ～はぁ～」
冴子は肩で息をしながら、タコ殴りにされ、やっと本来の死に神らしい外見になった竹田を睨み付けた。
「さぁ早く生き返らせてちょうだい！」
その迫力たるや推して知るべしである。
「あああ、あのですね、上の世界も捨てたもんじゃ無くてですね、このままと言う訳には……」
そんな冴子に、竹田は無謀な抵抗を試みようとしたのだが……
キッ！！――――という一睨みで押し黙ってしまう。

「ひょっとして、まだ足りなかったかしら」
「ひ、ひぃ～！ちょ、ちょっと待って下さい～。わわわわ、私には、生き返らせる事が出来ないんです」
今にも襲いかかってきそうな冴子に、竹田は慌てて訂正した。
「私には無理って、じゃあ一体私はどうなるのよ！！」
冴子の、竹田のネクタイを掴む手に力が加わった。
「私は生き返ることしか考えてないのよ！！」
「ぐぐぐっ、ぐるじいでず」
「ちゃんと生き返らせてくれるまで、絶対あんたを離さないからね！！」
「わわわわ、解りました。かかか、神様に、神様にお願いしますから、とにかく、とにかくその手を離してください～」
お願いするですって？！――――自分になんの落ち度もなく、完全に被害者の立場だった冴子にしてみれば、何で自分がお願いしなくてはいけないのか！と、その事が気に入らなかった。
しかしこの際、生き返ることが出来るならばそんな事は些細な問題でしかない。冴子は早く元の体に戻りたかったのである。

「じゃあとっとと、その神様とやらの所へ行くわよ！」
と、掛け声に、自然と力が入るのだった。

「ふ～ん、ここが死後の世界って奴？」
当然の事ながら、冴子に取って死後の世界は初めてだった。
あの後冴子は、竹田に連れられて上空へと飛び立った。死後の世界へ通じる扉が上空にあったからである。
高度が上がり、街がミニチュアの模型のように見えてくる頃、地上から見上げていた雲が目の前に迫る。
本当に死後の世界がこんな所に有るのかしら？――――冴子は少し不安になりながらも竹田の後を追うしかなかった。
そして、目の前の雲に向かって身を預けた時である、突然――――眩いばかりの光に包まれたと思ったら……そこには、現実世界と殆ど変わり映えのしない風景が広がっていた。

「さあ付きました。ここがあの世です」
そう言う竹田の顔は、なぜか少し得意顔だった。
そこには、道路もあれば家も建っていたし通行する人々もいれば空もあった。ただし、下の世界とは違って妙に体が軽く、フワフワとした感覚が落ち着かない。
冴子がそのことを言うと、竹田は「初めての方は大概そう感じるんですよ」と、またもや自慢げな表情で語る。
ムッ、私はまだ体験したくなかったわよ――――そんな竹田に冴子は嫌味を言ってやっると、竹田はすいませんと言って小さくなる。
「とにかく、私は生き返らせてくれるのよね」
冴子はなんの疑いも持っていなかった。
当然よね、何せ自分には全く責任がないのだから……そう、私は目の前にいる間抜けな死に神に間違われただけなのだ。神という存

在がいるならば、生き返るのが当然よね――と、冴子は思っていたからである。
「ええ……多分大丈夫かと」
鼻息の荒い冴子に、竹田は少し自信がない様子。
「何？良く聞こえなかったんだけど」
「い、いえ、何でも……それよりも、あそこが私達の地区の神様がいるビルです」
竹田があわてて指さした。
冴子がその方向に視線を移すとそこには、まるで新宿あたりの高層ビル群があり、その中で一つ、ひときわ高いビルが突き抜けるようにして建っている建物があった。
どうやらあそこに神様がいるらしい――冴子は少し複雑な気分になった。なぜなら、正月になれば神社に行くし、テストの前には神頼みをする事も多少？あったが、かと言って、神の存在を全面的に信じている訳ではなかったからである。
しかも、目の前の死神がうだつの上がらないサラリーマンの様な格好なのを見てしまうと、神様がどれ程の存在なのか――余計に疑わしくなる。
だがしかし、生き返らせてくれるなら誰でも良い――と言う気持ちが多分にあって、冴子はともかくビルの方へと歩き始めるのだった……

竹田と共に歩いていると、遠くに見えたビルがドンドンと目の前に迫ってきた。近くまで来るとその大きさがよく分かる。
周囲のビルも決して低いものでは無かったが、それは他の建物より頭一つ分くらい突き抜けている。建物自体も近代的と言うのか、まるで新宿都庁を思わせる程の立派なものだった。
案外神様って贅沢なのかも――冴子はビルを仰ぎ見ると、ふとそんな考えが浮かんだ。

「あそこに受付があります」
建物の中に入ると――――なんと自動ドアだった――――正面に受付らしいカウンターがあり、キチンと受付の者が来客への対応をしていた。
冴子が「なんか、あんまり下の世界と変わらないのね……」と、正直な感想を述べると、竹田が「ええ、そうなんですよ。むしろ事故などが無いこっちの世界の方が暮らしていて快適そのものなんです～。それで気は変わりません……よね。ははは」
と、未だに往生際の悪いことを言って、ジロリと冴子に睨まれた。
冴子の殺気の籠もった視線に諦めたのか、竹田はトボトボと、足取りも重く受け付けカウンターの方へと歩くしかなかった。
「あの、死神協会東京支部の竹田泰三ですけど～、神様にお会いしたいのですが　……」
受付の者は来客に対してマニュアル通りのお辞儀をしたのだが、顔をあげて竹田の顔を見た瞬間、「ひっ！」と言う短い悲鳴を上げた。
もちろん竹田が、本物の死に神らしい顔つきになっていたからだ。
「あ、ああ、あの、アポイントメントはお取りでしょうか」
係りの者は「どうしたの？この人……」と、戸惑う様子を見せたが、どうしてプロらしい対応をする。
「いえ、アポは取ってないんですけど」
「あの、それではアポをお取りになってから、いらっしゃって下さいませんか」
受付は丁寧な受け答えをしていたが、あくまで形式に拘る態度を見せた。しかし竹田としては取り次いで貰わない事には話にならない。後ろでにらみを利かせている冴子の視線を感じ、必死に取り次ぎを要求した。
「いや、これは命に関わる問題なので、早急に取り次いで欲しいのですが～」
ボクの命に関わるんです――――と、竹田は心の中でつぶやいた。

こういう所は上も下も変わらないのね……冴子は、竹田と受付のお役所仕事の様なやりとりを見て思った。しかし、事は自分の命に係わるのだ、予約などと悠長な事を言っている暇はないし、もちろん待つつもりも無かった。

ダン！――――

冴子は勢いよくカウンターに両手をつくと、「神って言うのはこのビルの何階にいるの！」と、凄みを利かせるのである。

「ひっ、さ、最上階に……」

隣にいた竹田ですらたじろぐ迫力に、受付が勝てる訳もない。受付の者は思わず後ずさりしながら答えていた。瞬間的に、竹田の顔を死に神らしい外見にしたのが冴子だと分かったのである。

冴子は複雑な視線を向けてる受付に、「ありがとう」と、ニッコリと微笑みを返すと、有無を言わさずエレベーター乗り場の方へと向かって歩き出すのだった　……

チーン――――

最上階は７０階だった。建物の中にいる時は高さを実感できないが、外から見た限りでは相当のモノである。冴子は最上階と聞いて、エレベーターと言えども多少の時間が掛かるだろうと思っていたのだが、存外、直通のエレベーターに乗った冴子はその早さに驚かされた。

「早いのね……」

かなりのスピードが出ているのだが、不思議と上昇感が少なかったので、意外な感じを受けたのである。しかし、そんな事で喜んでいる余裕など無かった。

「さ、行くわよ！」

と、エレベーターから降りた冴子は、初めて会う神と言う存在にしばかりの不安を覚えながら、気合いを入れて歩き出したのである。
一方竹田の方は、アポも取らずに神様の所へ行く事が怖いのか、それとも自分が仕事でミスした事を知られたくないのか、顔が少し引きつっていたのは言うまでもない。
「いや、あの、葛木さん……やっぱりまずいですよ～。あのですね、ウチの地区の神様は……」
竹田はここまで来ておきながら、引き返したいと言う顔だ。
「何言ってるのよ、私だって本来ならこんな所には来たくなかったのよ。それをどこかの誰かさんが間違ったりするからいけないんじゃない。とにかく神様の所へ案内してよ、何度か会ってるんでしょ」
「は、はいぃ……」
竹田は本当は逃げ出したい気持ちで一杯だったのだが、有無を言わさぬ冴子の勢いにどうすることも出来ない。もっとも、多少なりとも自分のせいであると言う罪悪感もあったので、覚悟を決めて案内することになった。

「こ、ここです～」

最上階ともなると作りが豪華なのか、少し歩くと、何も書かれていないドアが現れた。
外から見ても厚みがあるのが分かる。あまり知識の無い冴子にも、それが高級な素材で出来ている事が分かった。
竹田はドアの前で立ち止まると、一つ、大きく深呼吸してからノックをする。

――――コンコン！

内心、神様が不在であって欲しいと願う竹田だったが、しかし、それは儚い望みだったらしい。ノックをすると直ぐに、秘書を思わ

せる女性が現れると、その女性は「神様がお会いになるそうです」と、こちらが来ることを承知していたかの様に取り次いだのだ。
「それじゃ失礼します」
冴子はそれを見て、もはや遠慮する事など無いと思ったのか、しっかりとした足取りで部屋の中へと進む。
「神様はこの奥におられます」
冴子は、直ぐそこに神様がいるのかと思ったが、最初に入った部屋は秘書の控え室だったらしい、もう一つ奥に扉があって秘書の女性がそこまで案内した。
「死神協会の竹田様と、葛木冴子様がお見えになりました」
秘書の女性が凛とした声で告げると、部屋の中からは「どうぞはいりなさい」と、若い男の声が返ってくる。
ココまで何も考えずに来た冴子だったが、さすがに緊張したのか、深く息をして一呼吸置いてから奥の部屋へと足を進めた。

「いらっしゃい」
冴子が中にはいると、見るからに上等なスーツを着た男が、正面の大きな机から立ち上がって迎え入れた。
どうやらコレが神様らしい———冴子は神の姿を確認するや否や、ツカツカと机に歩み寄り大きく息を吸い込んだ。

すぅ〜

「一体全体どうしてこのうら若き17才の可愛い少女（自己評価）が死ななくちゃならないのよ！まだ彼氏だって作ってないし、キスだってしたことも無いのよ！！それに昨日買ってきた千疋屋のショートケーキだってまだ食べてないし！！！なに？間違えましたって？死後の世界を体験が出来たんだから良かったでしょうなんて下手なジョークなら聞かないわよ！！！！とにかく、このへっぽこ死神

のせいで間違って死んじゃったんだから、当然生き返らせてくれるんでしょうね！！！！！」
冴子は神の前に詰め寄りながら、鼻息も荒く一気に言い放った。
「ひぃ～！！か、葛木さん！神様にそんな態度で」
竹田はめまいを感じたのか、頭を抱えて絶句した。
しかしスーツ姿の神が、怒り狂う様子は無かった……いやむしろ、勢いよく詰め寄る冴子に、その表情は楽しげである。
「ふむ、予想どおりの娘だね葛木冴子君は……」と、やはり、楽しそうに微笑むのだった。

その時冴子は、初めて目の前のスーツを着た神を観察する余裕が出来た。

随分若い男の人なのね……まあこっちの世界が今までの世界と似た環境だったから、光の中から白い布をまとって妙にひん曲がった杖の老人が出てくるとは思えなかったけど、まさかこんなに若くてスーツ姿の神様なんてどう考えてもイメージと合わないわ。
せいぜい、どこかのエリートビジネスマンって感じが精一杯ね。
冴子は素直にそう思った。
「それで、あの……生き返らせてくれるんですよね？」
自分の主張を言い切って周りを見るだけの余裕が出てきたのか、それとも、目の前のスーツ姿の神が微笑みを絶やさない顔で見つめていたからか、冴子のトーンが少し落ちて丁寧な言葉遣いに変わっていた。
ちょっと乱暴だったかしら――――と、先程取った態度に少々恥じらいすらも感じられる。
「か、葛木さん！！神様に対してもう少し礼儀と言うモノを……」
竹田はこれ以上失礼な事をしたら神の怒りを買うかも知れない――――と思い、冴子をたしなめようとした。しかしスーツ姿の神は、

「まあ良いよ」と、微笑みながら手で抑えていた。
「ふ～む葛木冴子君、君は本当に間違えてここに来てしまったらしいね」
「そうなんです。このへっぽこ死神が、よりによって１０７才のお婆さんと間違えたんです」
冴子は竹田に鋭い視線を向ける。
「ひっ！そ、その通りであります……はい」
「解りました。どうやらこれは死神協会東京支部の不手際みたいですから、監督責任のある私が貴女の事を生き返らせていただきます」
「本当ですか！！」
受付の様子で、もう少し面倒くさい手続きなどが必要かと思ったのだが、思いもよらず簡単に生き返らせてくれるらしい――――冴子は今までの「生き返るのが当然」と言う思いも忘れ素直に喜びの表情を見せた。
「本当です。神である私が嘘を付くなんて出来ませんからね」
スーツ姿の神はそう言うと、少し目を細めて冴子を見つめるのだが、しかし冴子は生き返ることが嬉しくてそんな神の様子に気が付かない。
ただし――――と言う、スーツ姿の神の言葉にも、なんら疑問を差し挟まなかった。
「はい？」
「君は随分とこの竹田君に非道い事をしたねぇ」
神は、タコ殴りにされて死神らしい顔付きになった竹田を見た。
「だ、だってそれは、最初に間違えたこいつが悪いんじゃないですか……」
（確かにタコ殴りにしたのはヤリスギだったけど）
「それにしても、こちらの世界でも法律って言うのがあってね、タコ殴りの暴行事件というのは非常に罪が重いんだよ。それを無実と言うわけにも行かないねぇ」
「ちょ、ちょっと待って下さい。そんなの非道いです。私はこのへ

っぽこ死神のせいでこっちの世界に連れてこられたんですよ。悪いのはこのへっぽこ死神じゃないですか」
やっと生き返られると思ったのに———冴子は自分の行動を呪った。
がしかし、やっぱり理不尽さも感じずにはおけなかった。
「まあ、本来なら暴行罪で逮捕される所だけど」
「そんな！それこそ非道いじゃ無いですか！！」
「まあまあ話は最後まで聞きなさい」
神は手で「まあまあ」とやって早る冴子をなだめると、子供が、何か良いいたずらでも思いついたような顔になって「そこで一つ、生き返るのに条件を付けましょう」と付け加えた。
「は？」
「うん、良し、そうしよう……」
神は一人、納得顔になってうなずく。
「実はねえ、冴子君」
「は、はい……」
「君を生き返らせるのには、一週間の時間が必要なんだよ」
「え？じゃあ、私は一週間も生き返られないんですか？じゃ、じゃあ、私の体、腐っちゃうじゃ無いですか！！それに生き返る条件って一体どういう事なんですか」
生き返ったと思ったら体の方が腐っていた！……なんて冗談ではない。いくらスリムになりたいとは思っても、骨だけって言うのは行き過ぎだ。それに、生き返る為に条件を付けるとはどういう事なのだろうか？微笑みを浮かべるその表情からは想像が付かないが、何故だかこの神様を見ているととんでもない事を言い出しそうな予感がする。
冴子は、一見エリートビジネスマンの様に見える神の思考に、想像が付かなかった。もっとも、神様の考える事が一介の女子高生に解ってしまったら、それはそれで問題なのだろうが……
「いやいや、君の体の時間は止めておいたからね、腐る事はありま

せんよ。それから、生き返る条件の方はね、タコ殴り事件の罰の変わりだと思って下さい」
「で、ですけど」
「ダメダメ、もう決めちゃったから」
「き、決めちゃったって……」
（なんてアバウトな神様なの！）
「まあ条件と言っても、それ程難しい事じゃないですよ」
「一体、一体どんな条件なんですか？」
「それは」
「……それは？」
ゴクリ――冴子はツバを飲み込んだ。
「今日から君が、一週間以内にキスをすること」

……はぁ！？

冴子は自分の聞き間違えかと思って、思わず間の抜けた顔で聞き返してしまった。
「だから、君が無事に生き返るには、一週間以内に誰かとキスをしなくちゃいけないんだよ」

……

「なんですか！その条件は！！」
冴子が顔を真っ赤にしながら抗議の声をあげたのは、言うまでも無かった。

――キーンコーンカーンコーン

どこの学校でも変わり映えのしないチャイムの音が授業の終了を

告げると、冴子はビクン！と体を震わせて目を覚ました。

――――はっ！！

「こ、ここは……」

周囲を見渡すと、そこには見慣れた教室の風景が広がっていた。冴子は一瞬、何がどうしたのか解らなかったが、周囲の風景を見ているうちに徐々に自分の立場を把握する事が出来た。

「はぁ～やっぱりアレは、夢だったのね……」

今までの理不尽な出来事が夢だと分かると、冴子はホッと息を吐きながら胸をなで下ろした。

「そうよね、あんな馬鹿げた事が現実にあるわけないじゃない。疲れてるのかな　……私」

今見ていた夢があまりにも突拍子も無い内容だったので、信じられなかったのである。

全く馬鹿馬鹿しいわよねスーツ姿の神様が登場するなんて――――冴子が先程観ていた夢の内容を思い返すと、自分が想像力豊かな人間なんだと思わず苦笑してしまう。

それより、今って何限なのかしら？やすみんの授業までは覚えてるんだけど　……冴子は改めて周囲の様子をうかがった――――すると。

「ヤダ！！もう、放課後じゃない！！」

先程のチャイムが放課後を告げる物だったと知った。

確かやすみんの古典の授業を受けていたハズだから……三限からずーっと寝ていたって事？――――冴子はとんでもない事実に言葉が出なかった。それもそうだ、今日は五限のグラマーが最後の授業だったのだが、合計三教科も眠りっぱなしだったのだから。

だいたい、なんで先生が気が付かないのよ……それにお昼の時間だってあったわけだし、友達の誰か一人でも起こしてくれないって言うのはどういう事！？

冴子が何とも言えない気持ちで茫然自失になっていると、中学校からの友達で、今も同じクラスの平坂智美がやってきた。

「おっす冴子。やっと起きたんだ」

男っぽい口調の智美は、片手をあげながら挨拶をしてくる。

「やっとって……やっぱり私、古典の授業からずっと眠ってた？」

「そうだよ。冴子ってば、いっくら呼びかけてもピクリともしないんだもんな。まるで死んだように寝てるなって、昌代と笑ってたんだ」

死んだように――――冴子には笑えない言葉だった。

「そ、それにしたって、起こしてくれても良いじゃない」

「え？はははは」

智美が何かを誤魔化すようにして笑う。

「なによ、その苦笑いは」

「だってお前、寝起きがスッゴク悪いんだもん」

「う～ん」

友達にまでそう思われているとは……冴子は普段の行いを改めようとかしら？　――――と、密かに考えてしまう。

「そうだ、俺これから用事があるんだ。悪いけど先に帰るぜ」

「あ、うん、私もそろそろ帰るわ」

「じゃ、お先～」

来たときと同じ、智美は軽く手を振りながら教室を後にした。

「じゃ、明日」

冴子もそれに手を挙げて答える。

ふぁ～あ――――と、ついでに欠伸と伸びをした。

「全く今日はなんだったのかしらね。へっぽこな死神に合うわスーツ姿の神に合うわ、あげく、理不尽な条件を突きつけられたと思ったら、実は全部夢だった　……なんて。それに、授業を三つも寝過ごすなんてどうかしてるわね」

いたた――――長時間、ずっと腕を枕に頭を載せていたからか、伸

びをすると冴子の腕に鈍い痛みが襲ってきた。
鬱血していたのかもしれない。冴子は、腕からしびれが取れるまで、あまり動かない様にじっとすることにした。
すると、斜め後ろの方からどこかで聞いたことのある声が聞こえるのである。
「そうですね～ずっと寝てたから節々も固まりますよね～」
「そうなのよ。いくら若いったって、三時間以上ずっと寝ているって言うのはね……」
そう答えながら、何気なく後ろを振り返える。

――――！！

冴子は、そこに思いがけない顔を見つけて言葉を失った。
「あ、あああ、あ」
冴子の頭の中が、一気にゴチャゴチャになって思考がまとまらなかった。あまりのショックで、出てくる言葉と言えば、あ～とか、う～と言った、幼い子供の様なものばかりである。
「し～、静かにしていて下さい。ボクの姿は冴子さん以外には見えていないんですから……」
男は、冴子が叫び出すのではないか？と、それを制しようとた。
そう、その男とは……死神協会東京支部の竹田泰三だったのである。

「嘘！」
冴子は信じられないモノを目の前にして絶句した。
「ど、どどど、どうして！！」
まさか！アレが事実だったって事！？――――今まで夢だと思っていた事が、急速に現実として目の前に現れた。
「なんであんたがココにいるのよ！！」

冴子は飛んでもない事実に、思わず大きな声を発していた。すると、その声を聞きつけた昌代が、不思議そうな顔でやってきた。
「さ、冴子……誰と話してるの？」
萩原昌代は智美と同様、冴子とは中学校からの付き合いだったが、彼女には竹田の姿は見えていない。冴子が誰もいない空間に向かって驚いたり、大きな声をあげている姿は、不思議な行動としか写らなかった。
しかし冴子には、そんな事など解るハズもない。
「だっ……だって、昌代には見えないの？」
と、竹田の方を指差したのである。
「え……っと、何が？」
昌代は冴子が指差した『誰もいない』空間を眺め、戸惑っていた。
「ほらそこに」
冴子はもう一度、昌代には見えない竹田の事を指差しながら言った。
「さ、冴子さん～、私の姿は普通の人には見えないんです～。ですから、あなたも人前では私と話しをしない方が良いです～危ない人に見られます～」
「誰が危ない人ですって！あんたが言うな！！」
冴子はまたもや誰もいない空間に向かって話していた――――とは言っても、本人には見ているのだが、昌代には訳が分からない。冴子がとうとう頭の方にきてしまったのか？と思わず不安になってしまった。
「さ、冴子……ちょっと疲れてるんじゃない」
気の毒な――――と言ったように、哀れみのこもった瞳だった。
「ほ、ほら冴子さん、彼女には私の姿は見えていないんです。だから人前で私と話していると変な人に思われるので、ここは彼女に合わせた方が」
「ぐっ、わ、解ったわよ……」
とうとう冴子は、これが夢ではないと認めざるを得なかった。

「あ、あははは っ、昌代……私ちょっと寝ぼけてたみたい……ははは」
言い訳にも力が無く、乾いた笑いが虚しい。
「もう、とうとう冴子が変になったんじゃ無いかと思ったじゃない」
「とうとうって何よ、とうとうって。それじゃまるで、普段から危なっかしいと思ってるって事？」
「え？あはははは、何でもないのよ、何でも」
昌代の視線が空を泳ぐ。
「そ、そう言えばさ冴子、今日は良く寝てたよね。お昼に一回起こそうと思ったんだけど、全然起きなかったんだよ。でね、智美と一緒に、死んだように寝てるねって話してたんだから……」
昌代は、冴子が本当に死んでいることなど知らずに笑いながら話していた。
「本当に死んじゃったんだけどね……」
そんな昌代に冴子は、少しだけやけになって答えるしかなかった……

「そうだ、ねえ冴子、これから新しくできたアイスクリーム屋さんに行かない？冴子も行きたいって言ってた例のお店なんだけど」
そんな冴子の様子に気が付かなかった昌代は、明るい話題を提供してきた。
「ごめん。私これからちょっと用事があるから……」
冴子も、何もなければ昌代の誘いにのって気晴らしに遊びたいと思うのだが、とにかく夢の内容、というより、現実に起きた事件の事を整理したかった。それに、色々と竹田に聞いて確かめたい事もある。
用事があると言って、断るしかなかった。
「ふ～ん、そうなんだ。じゃまた今度行こうね」
「うん、また今度ね」

話が終わると昌代は、智美と同じように手を振って教室を出ていった。

「ふ～」冴子が思わずため息をつく。

すると「冴子さん、ため息はですね～、一つつくと、幸せも一つ逃げてしまうんですよ～」と、間延びした声が掛かった。

「あんたが言うな、あんたがぁ～！」

冴子はそんな竹田のネクタイを締め付けてやりたいと思ったが、またこの男に何かして、生き返るための条件を追加されても困る……と、なんとか自制心が働いて持ちこたえる事が出来た。

「それよりも、あの神様の奴……」

冴子は神の言った条件の事を思い出していた。

「ですから冴子君、君はこの先一週間の間にキスをするのです。そうで無ければ生き返えれませんよ」

鼻息も荒く詰め寄る冴子を前にして、スーツ姿の神はクールな顔で言った。

「ちょ、なんですかその条件は！！」

冴子としては自分の命が掛かっているのに、そんな不真面目な条件を出されてはたまらない。

「だいたい間違ってこっちに来たって言うのに！」

「それはさっきも言ったよ、この竹田君をタコ殴りにした罰の変わりに……と」

「だ、だからって、何でその……キスなんかしなくちゃいけないんですか！！」

冴子は目の前にいる人物？が、本物の神様なのか疑問に思えてきた。

「いやいや、これには理由があってね、ボクはこの東京地区を預かってはいるけども、元々の仕事は恋愛の分野なのです。それでです、

君を生き返らせるにも、君の愛の力をボクが受け取って、その力を生き返らせる為の力に変換する必要があるんですよ」
神は言い終えると「ははは」と、笑った。
「そ、そんな嘘っぽい……」
「神であるボクには嘘は付けません」
「その割には視線が宙を泳いでますけど」
「と、とにかく、ボクはもう決めちゃったからね。君が一週間の間にキスする事が出来なければ、このままこちらの世界で暮らして貰うよ……まあ、事情が事情だけに、こちらでは優遇させて貰うけどね」
神はそう言うと、秘書の女性を呼んだ。
「あ～この二人の処分が決定したから、必要な書類を作成して下さい。そうそう、竹田君は冴子君がキスをするかどうか見届けなさい。地上勤務決定」
「ちょ、本当にそんな条件なんですか！！しかもどうしてこいつが私の監視役なんです！代えてください！！」
冴子としては竹田の顔など見たくもない。なにせ竹田のせいでこんな所に来なくてはならなくなったのだ。それに、キスの事にしてもそうだ。未だに彼氏など作ったことなど無い冴子には、ファーストキスだってまだだった。
それを一週間の間にキスをしなくてはならないなど、心の準備も相手の準備？も出来ていない。
「ほうほう冴子君は、キスをする事は無理だと言うんだね？うんうん、そうだねえ、君には難しいのかも知れないねえ……」
神はそんな冴子に可哀相な――と言った顔を向けてくる。
「なっ！無理なんて事あるわけないじゃないですか！」
売り言葉に買い言葉、冴子は啖呵を切ると、持ち前の負けん気がむくむくと頭をもたげてきた。
「いやいや、悪かったね。冴子君にはちょっと酷な条件だったかな……」

「わ、解ったわよ！何よキスぐらい、私にキスしたいって言う男なんて、いっぱいいるんだから」
ほとんど勢いだけだったが、冴子は神の出した条件をのんでしまった。
神の方はと言えば、そんな冴子をニヤニヤと眺めている。冴子はそんな神に、乗せられた――と思ったが後の祭り、神は早々に実行に移してしまった。
「そうですか。それじゃ今すぐにでもスタートしましょう」
そう言って、神は一枚の書類を作りだした。
「そうそう、こちらも間違えてしまったので、君には特別な力を幾つか与えておきますからね。それに、君の肉体は既に時間が止まっていますので、腐る心配はありません」
「腐ってたまるもんですか！」
冴子はそんな冗談を言う神に文句の一つでも言いたかったのだが、言葉を発する前に意識が遠のいて行くのが解った。
「ちょ……ちょっと……ま……って……」
「頑張りなさい冴子君……君なら大丈夫ですよ……」
冴子は完全に意識を失う前に、そんな言葉を聞いた気がした。

「あ～今考えると、どうも神にしてやられたって気がするわ」
冴子は回想を終えると、どうも自分の性格を見抜かれていてそれを利用された気がした。
「まあ良いじゃないですか～。とにかくキスさえ出来れば生き返れるんですし～」
――――キッ！！
「さっきから、あんたに言われたくないって言うの！」
冴子は、こんな状況に陥る原因を作った竹田に鋭い視線を向けた。

「全くもう！よりによって、こんな男に私の監視役をさせるなんて……」
これも冴子の不満の一つだったが、どうやってもあの神にはぐらかされそうな気がして、反抗する気も失せてくる。
「はぁ～」冴子はため息と共に帰り支度をすると、取り敢えず教室を出ようと席を立った。
「あんたと話しをするには人目のないところ……自分の部屋とかじゃ無いといけないわね。他人に見られたら変な人間だと思われてしまうわ。とにかく、一端帰るわよ」
冴子は重い気持ちで何とか帰り支度を済ませると、教室の出口に向かって歩き始めた。
全く今日は貴重な体験ばかりで良い人生経験だったわよ！……って、やっぱり死んでしまったんだから悪いに決まってるんだけど、二度とこんな経験はしたくないわね。
それにしても……キス……か。
「冴子さん～」
神様にあんな大見得を切ったのは良いけれど、実際、私には恋人なんていないし……どうしよう。
「あの、冴子さん？」
「って、うるさいわね、ちょっと考え事してるんだから」と、冴子は後ろにいる竹田の方を振り返った。すると、そこには閉まったままの教室のドアがあった。
―――アレ？私ドアを開けたかしら？
思わず、閉まったままのドアを見つめ続けてしまう。すると、そのドアから、にわかに竹田の体が通り抜けてきた。
「ちょ、なんであんたすり抜けてるのよ！！」
テレビなどで人が壁を通り抜けてくるのは見ていたが、実際に目の前で見るのとは訳が違う。竹田が教室のドアを通り抜けてくる姿は、見ていてあまり気持ちの良いものではなかった。

やっぱりこいつ死神なんだ――――と、苦々しい思いがこみ上げてくる。
「やだなぁ～冴子さん。あなただって今すり抜けてたじゃないですか……あんまり人の多い所では使わない方が良いですよ～特別な力は」
完全にドアをすり抜けると、竹田は言った。
「はぁ？」
私がすり抜けたって？そんな事あるわけないじゃない――――冴子は竹田の言っている意味が分からなかった。
「え？冴子さん、じゃああなたは、気が付かないウチにドアをすり抜けてしまったんですか？」
「気が付かないって、今、少し考え事をしてたから……って、まさか！？」
「はい、神様があなたに与えた『特別な力』の一つデス～」
「ええっ！！」
冴子は今日、何度目かの驚きの声をあげた。きっと、一日にこれほど驚かせられる事などめったに無いに違いない。
「さ、冴子さん声を落とさないと。とにかく私は一般の方には見えないんですから～」
「だからって……私は今、この教室のドアを通り抜けてきたって言うの？」
映画じゃ無いんだから――――と、冴子は信じられないと言った気持ちだった。
「そうですよ。私達死神や上の住人だったら、誰でもって訳ではありませんが、だいたい出来ますよ～」
「って、私は上の住人じゃ無いじゃない！　全くもう、あの神の仕業ね！！」
人を驚かせて楽しもうとしてるんだわ！――――冴子はスーツ姿の神の事を思い出すと、どうしてもいたずらされている様でしゃくに障った。

「ですけども……冴子さんの体は一応時間が止まっている状態ですが、生き返るまでに不慮の事故とかにあっては困るので、そう言う特殊な能力を与えてるんですよ～。別に神様がいたずらしている訳では無いんです～」
「な、何だか納得がいかないわ……」
竹田が言うことも解るが、複雑な心境だ。
「そ、それより冴子さん」
「何よ」
「しぃ～！後ろに人が」
竹田は慌てて人差し指を口に当てて、冴子に黙る様に――――という合図を送ったが、少しばかり遅かった。
「え？」
後ろを振り返ると、そこには冴子と同じクラスの男が立っていたのである。

男は「か、葛木さん……教室のドアと何話してるの？」と、何かいけないモノを見てしまった様な顔で言った。
もちろん彼には竹田の姿は見えてない。冴子が一人、教室のドアに向かって怒ったり驚いたりしていると言う、かなりシュールな姿が映し出されていたのである。
「え？え……っと、そう、私演劇に興味があって、昨日見た内容をね、少し練習してたのよ……」
冴子の言い訳はかなり苦しいモノであったが、この場合どうしようも無かった。
「そ、そうなんだ。あは、あはははは……でも、教室のドアに向かってやるのはどうかと思うよ。うん、それじゃ俺、教室に用があるから……ははは」
男はこれ以上深く追求してはいけないと思ったのか、そそくさと教室の中へと消えていった。
完全に誤解されたわね――――冴子はそれを思うと、またまた気が

重くなる。
と、とにかく、学校でこの死神と話をするのは得策じゃない。いったん、家に帰らないと……冴子は盛大なため息をつくと、足取りも重く学校を後にするのだった。

後編の前編：あなたは友達の存在を信じますか？

「はぁ～」

冴子は家に帰り着くやいなやため息をついた。

「ただいま……」

玄関を開ける手にも力が入らない。今日一日、色んな事がありすぎて疲れてしまったのである。

取り敢えず着替えて早く落ち着きたい――――冴子は重い足を引きずりながら、二階の自分の部屋へと階段を登った。

冴子の家はごく普通の二階建ての一軒家である。そして二階の一番奥、フローリングの八畳間が冴子の部屋だった。

冴子はブルー系の色が好きなので部屋の中も淡いブルーを基調にクールにまとめているのだが、意外にも？部屋は綺麗に片づけられていた。

普段大雑把な性格をしている冴子だったが、掃除などは結構マメにする方で、こういう点は実に女の子らしいのである。

冴子は自分の部屋に戻ると、いつもの場所に鞄を置いて早速制服を脱ぎだした。制服はそれ程窮屈なモノではなかったが、とにかく今日は疲れているので早く普段着に着替えてリラックスしたいと言うのが本音である。

「全く、今日はなんて日なのかしら……間抜けな死神には間違えて殺されるし、スーツを来た神様には会うし、果ては、何で生き返るのに私がキスをしなくちゃならないのよ」

ブツブツブツ――――冴子はブレザーを脱ぎ、リボンを外してYシャツのボタンを一つずつ外しながら愚痴っていた。後ろに竹田がついてきている事も忘れて　……

竹田の方はと言えば、後について二階の部屋まで来たのは良いのだが、冴子が急に着替えを始めたのでどうして良いのか戸惑った。

本来なら黙って部屋を出ていけば良いものの、あまりの展開にそのタイミングを失ったのである。
「あ、あの～」
「そうそう、あの死神の口調が妙に間延びしていて――――って、なんであんたがここまで入ってきてるのよ！！」
冴子は背後でおろおろしている竹田に気が付いた。
「もう！！出てってったら出ていけ！！」
「は、はい～」
も～っ、なんだって言うのよ！！――――冴子は竹田を追い出すと、さらに頭をカッカさせながら着替えを続けた。いつか絶対に八つ裂きにしてやる！などと、怖いことを考えながら……

「良いわよ、入っても」
冴子は着替え終わると、わざとトゲのある声でドアの外に控えていた竹田を呼んだ。竹田はそんな冴子の事が余程怖かったのか、顔を引きつらせている。
「失礼しますです」
冴子はそんな竹田の態度など気にせずに、入ってくるなり間髪入れずに言ってやる事にした。
「とにかく、私はこれから一週間の間に、その、キスをしなくちゃならない訳だけど……家に居る時はあんたは外で暮らしなさいよ。いくら見届け役だからって私の家の中ではそんな事になるわけ無いんだから。そうそう一応言っておくけど、今後一切、私の部屋に入ったらタコ殴りじゃ済まないからね」
と、ココまで一気に言うと、さらに「じゃ、それだけ、明日は７時４５分に家をでるから、それまでこの家にも入ってこないでよ。じゃ、さよなら」と続けて、犬でも追い払うかのように手で払う真似をした。
「そ、そんな！！私、行くところ無いんです～。一週間は上の世界にも戻れないですし」

「そんなの知らないわよ。自分の責任、少しくらいは取りなさいよね！」
冗談じゃない――――私はこれでも一応乙女なのだ、こんな男を同じ部屋に入れてなるものか。いや、そもそもこの男の為に苦労する羽目になったのだ、どうして親切なんかに出来るだろう。
冴子はジロリと、竹田の事を睨みつける。
「ひぃ！わ、解りました」
竹田はそんな冴子に思わず敬礼をすると、回れ右をして、いそいそと部屋を出て行くしかなかった。

「ふ～」
冴子は竹田が出ていったのを確認すると、大きくため息をついてベッドへと倒れ込んだ。
「それにしてもどうしよう、キスの相手……」
枕に顔をうずめると、少し憂鬱な気分になった。何せ生まれてからこのかた、自慢ではないが男友達は沢山いても、彼氏などという甘い関係になった男など一度も無いのだ。ましてやキスなど、経験したことなどあろうハズもない。
友達同士で話していて、そう言う方面の話題になると、必ず遅れてるだの古風だのと言われるけれど……冴子は別に無理をしてまでそんな経験をしようとは思わなかった。
興味が無い訳じゃ無いんだけど……でも、雰囲気だけに流される様な恋愛なんてしたくないじゃない。
そうよ、自分の一番大切な気持ちだもの、遅い早いの問題じゃ無いんだわ。
冴子は枕から顔をあげた。
でも……今度ばかりはそんな悠長な事、言ってられないのよね。何せ、一週間以内に誰かとキス出来なければ……

ブルブル――――

冴子は自分の中の嫌な想像を振り払うかの様に頭を振った。
い、嫌な想像をしてしまったわ。と、とにかく、キスは大事にしたかったけど、キスと命じゃ、やっぱり命を優先にしたいじゃない――――冴子はため息と共にもう一度枕に顔を埋めた。

「だけど、本当にどうしようかな……」
冴子は本当に頭が痛む様な感覚に囚われていた。

もし、もしもよ、神様は「キス」が生き返る条件って言っただけで、別に相手を男と限定してないんだから、女の子同士って言うのも良いのかしら。そしたら、彼氏が出来なくて困った時、智美か昌代を襲って彼女達の唇を奪ってもＯＫなのよね……これなら、ファーストキスって言っても、相手が女の子なんだから大した問題にもならない……訳は無いか。
う～ん……どう考えても良い案とは言えないわよね。万が一にも智美や昌代を襲ったりすれば、その噂が広がって学校にいられなくなってしまうのが目に見えているもの。
かと言って、今から適当な男を見繕ってその相手とキスをするなんて、それはそれで考え物だ。
どうしよう――――そんな思いが、冴子の頭の中で山手線の様にグルグルと回っていた。そしてそれは随分と頭の中を周回していたらしい、冴子が顔を起こして時計を確かめると、既に相当な時間が経過しているのが目に入った。
「アイツに……相談してみようかな」
イヤ！ダメダメダメ！！やっぱそれは無し――――冴子は声に出してつぶやいてみたのだが、思い返したようにそれを否定した。
アイツに相談なんかしても信じてもらえる訳がない。それに、一体どう説明すればいいのよ……実は私、死神に間違って殺されちゃって、それで上の世界に逝ったらスーツを着た神様がいて、それで

生き返る為の条件としてキスをしなくてはならなくなって、私はどうして良いのか困ってるの……

なんて！漫画の世界じゃあるまいし、そんな事言ったら頭がおかしくなったのかと思われるに決まってる！――――冴子は頭をかかえていた。

「でも、だからと言ってよ、もし本当にキスが出来なかったら死んじゃう訳だし　……ああっ、でもやっぱり信じてもらえるとも思えないし……」

冴子はまたもや振り出しに戻っていた。

何時間考えてたんだろう……冴子は母親の夕食が出来たと言う声をベッドの中で聞いた。が、結局食事を取る気にはなれなかった。外には街灯の灯がともり、空には星のカーテンがおりている。

しかし、未だに冴子の頭の中には同じ考えがグルグルと渦を巻いていた。誰とキスをするかとか、そのキスをするまでにどうすれば良いのか……など、色々な事を考えては、結局振り出しに戻ってしまうと言う繰り返しだったのである。

しかし冴子は、そんな繰り返しの中で漸く一つの結論を出そうとしていた。

「やっぱりダメ、誰かにこの秘密を共有して貰わなくちゃ、私、とても持たないわ」

そう、自分が置かれている状況を、誰かに知っていてもらいたいと言う事だった。もし一週間の間にキスが出来なかったら……そしてもし、死んでしまう様な事になったら――――冴子は必死に耐えているが、それらのことが不安で不安で仕方が無かった。

そして、出来るならば、その悩みを誰かに知ってもらいたいと思ったのである。

冴子は明るい性格で悩みなど無いと思われがちだが、その実、臆病な部分も持ち合わせた普通の女の子なのだ。いくら上の世界が下の世界とあまり変わらないとは言え、改めて死と言う事を考えると

怖くてたまらなかった。
「アイツ……今日もいるのかな」
時計を見れば夜の八時を回り、外は十分に暗くなっていた。星が綺麗に見え始める頃である。
冴子は窓を開け隣の家の屋根の上をのぞいてみる事にした。
「いた……」
冴子の家はいわゆる建て売りの住宅で、隣の家と左右対称の間取りになっている。ちょっとしたガレージも階段の位置も部屋の配置もほとんどが左右対称になっていて、屋上にあるベランダも、隣の家とはくっつく様にして同じ作りになっていた。
そして冴子は、その場所に一人の男の姿を見つけて大きく深呼吸するのだった……

「ゆ、裕太……久しぶり」
冴子は自分の家のベランダに出ると、隣の家のベランダに居る男に声を掛けた。その男とは、冴子とは生まれた頃からの幼馴染みである笹倉裕太である。
裕太は、小さい頃から天体観測が好きで、屋上の様になっているベランダに出ては天体望遠鏡を夜空に向けているのだ。
「冴子か、珍しいなお前がココに来るなんて」
望遠鏡の位置を微調整しながら裕太は答えていた。
「そう……かな」
「だって、冴子は天体観測なんて興味ないんじゃ無かったっけ？」
その昔、二人がまだ小学生の頃、冴子は裕太の家のベランダが近いのを良いことに、裕太が天体観測を始めるとベランダをまたいで隣に移り一緒に観測をしていた時代がある。
が、ジッとしているのが性に合わないのか、結局冴子は「つまらない！」と言って途中で帰ってしまうのである。裕太はそんな冴子の性格を知っているからか、わざとらしく笑った。

「う、うん……別に嫌いじゃ無いんだけど、ちょっとね」
「ははは、無理しなくても良いよ。それよりどうしたんだよ？」
小学生の頃は良く二人で色々と話をしていたのだが、中学生になり、別々の高校へ通うようになってからは、こういった形であうのも久しぶりだ。
珍しい客人への質問は当然だった。
「あ、うん、その、ちょっとさ、聞いて貰いたいことがあって……取り敢えずそっちに行っても良いかな？」
珍しく歯切れの悪い冴子を見ると、裕太は可笑しかった。
「どうしたんだよ。昔ならダメって言っても無理矢理こっちに来てたくせに」
「それは昔の事じゃない。今は私だって17才の女の子なんですからね、そんな無理なんてしないわよ」
と言いながら、冴子はベランダの手すりに手をかけると、裕太のいる方へと飛び移る。
「わっ、な、何だよ、結局こっちに来るんじゃないか」
「だって、ダメって断わらなかったじゃない。勝手にじゃ無いわよ、勝手にじゃ」
「まあ良いけどさ。それよりどうしたんだよ本当に？」
裕太は天体望遠鏡から目を離すと、冴子の方へ向き直った。
「あ、あのさ……裕太」
「ん？」
実は私、死んじゃったの――――冴子は喉まででかかった言葉を飲み込んだ。
裕太は信じてくれるだろうか？自分が本当は死んでいて、神様に生き返らせてもらえる事になったんだけど、それにはキスが必要で、それで……それで？私はその事を話してどうしようと思うのだろうか――――冴子の思考がそこで止まった。
「どうしたんだよ冴子。急にだまりこんじゃって」

「あ、あのさ……」
「なんだよ、いつもの冴子らしくないじゃん」
「あの……裕太はさ、スーツ姿の神様の存在を信じる？」
「はぁ～？」
って！何を口走ってるのよ私は！！――――冴子は順序よく話してみようと思ったのに、話す寸前に頭が混乱して、イキナリうさんくさい部分から始めてしまった。
「お、おい、冴子……お前新興宗教にでもはまってるのか？」
「って！違ぁ～う！！」
（あ～やっぱり話し始めた内容が悪かった！！）
「そんなんじゃ無くて、わ、私が死神に間違って殺されちゃって、それでもって上の世界に逝って神様に抗議したら生き返られる事になって。でも、その条件に、私が誰かとキスをしなくちゃいけなくなって、で、その時の神様がスーツを着てて、気が付いたら学校の授業が終わっててって……あーもー話がまとまらないけど、とにかく、私が生き返るのには、誰かとキスしなくちゃいけなくなっちゃったのよ！！」
冴子は大きく身振り手振りで説明した。
しかし裕太としてみれば、こんな支離滅裂で突飛も無い話では理解できる訳がない。
「あ～」と、唸ってあきれ顔だった。
「あ、その顔、信じてないでしょう！！私だって本当は嘘だって信じたいのよ！」
「いや、あの。冴子はあまりにも早口だったから、良く聞き取れなかったんだけど」
「だ、だから……」冴子は今までの自分の身に起きたことを、最初から順々に説明を始める結果になった。
「で、私が生き返る為にはキスが必要なのよ」
冴子は説明が終わると、裕太の顔をジッと見つめた。
「あのさ……どうも俺には」

「その顔！信じてないでしょう！」
さっきと変わってない！――――冴子は同じ言葉を繰り返した。
「いや、確かにね、漫画の内容としては面白いかも知れないけど」
「違うのよ！これは作り話なんかじゃ無くて……」
冴子は困惑顔の裕太を見て、どうあっても信じてくれそうに無いことが解った。確かに、常識的に考えればそれは無理も無いことなのだが、それでも冴子は、裕太だけは自分の言った事を理解してくれると、心のどこかで期待をしていたのも事実である。
だからこそ、こんな荒唐無稽な話をしたのだ。
しかし――――

「良いわよ！もう裕太なんかに頼ったりしない！私自身で何とかしてみせるわよ！！」
な、なによ裕太のバカ！私が作り話でもしてると思って！！
冴子は勢い良く言うと、ベランダを乗り越えて自分の家に戻り、ガラガラ　――――ピシャ！といった風に勢いよく窓をしめてしまった。
「お、おい冴子、どうしたんだよ」
事情の解らない裕太は、この冴子の変わり様にどうしたモノかと思ったが、引き留めようと思っても、冴子がいっぺんこうなると止められない事も知っていた。
案の定冴子は、引き留めようとする裕太を振り返り――――バカ！！！と、ひとこと、もの凄い声で言うと、部屋のカーテンを荒々しく締めてしまった。
まるで台風の様だ――――裕太はそう思いながら、冴子の消えていった部屋をしばらく眺めるしかなかった。

「何よ裕太のバカバカバカバカバカバカバカ！バカ！！！」
冴子は自分の部屋に戻ると、枕に八つ当たりをして顔を埋めた。
裕太なら私の事を信じてくれると思ったのに、裕太なら私の事を

心配してくれると思ったのに、裕太なら……私の事を救ってくれると思ったのに……キスの相手、誰でも良いって訳じゃ無いんだぞ……

「バカ……」

最後のバカは少し、弱々しかった。

―――残り日数6日土曜日―――

その日、冴子はいつもと同じ時間に目覚めると、普段と変わらない行動をしていた。

ベッドから起きあがり、けたたましく鳴り響いている目覚ましに垂直チョップを加えて黙らせると、寝間着のまま二階にある洗面所で顔を洗った。そして、朝食を取るためにダイニングキッチンへと階段を降りる。

朝食もいつもと変わらなかった。トーストにバターを塗ったモノと、アメリカン珈琲にたっぷりの牛乳と少しだけココア―――砂糖だと甘くなりすぎるので、冴子はココアにしていた―――を入れた飲み物を飲んだ。

そして食べ終わると直ぐに歯磨きを済ませ、それから自分の部屋に戻って制服に着替える。肩より少しだけ上に来る髪の毛は、それ程手入れをしなくてもまとまるので、軽くブラシを通すだけ。

朝の時間ほど規則正しく過ぎていくモノはない。一通りの作業を終えて時計を見ると、やはり、いつもと同じ家を出る時間になろうとしていた。

冴子は鞄を手に階段を降りる、いつもと同じ動作で靴を履いた……ただし、ここで一つ、普段とは違う行動を取った。

「うっし行くか！」

冴子は気合いの声と共に扉を開けたのである。

悩むのは止めよう――――冴子は色々と悩んだ結果に導き出した答えであった。
自分がいくら悩んだところで問題は解決しないし、問題を解決する為には行動を起こさなくてはならない！
この単純な事に気が付いた冴子は悩むのを止めたのである。
そして、行動を起こすなら気合いを入れよう！と、玄関先で気合いの声をあげたのだった。
冴子は行動の人なのである。

まずは情報収集だわ――――冴子は悩むことを止めると、ドンドンと自分のやるべき事が見えてきた。
とにもかくにも、この世にとどまるかそれとも上の世界に逝くかの瀬戸際なのだ。それになんと言っても自分の大切なファーストキスが掛かっている……この際キスをするなら思いっきりカッコイイ男にしよう――――冴子は悩むことを止めたと同時にそう思う事に決めた。
冴子は行動派であると共に、少しだけ見栄っ張りだった。
しかし、そうは言ったモノの、カッコイイ男の情報を持っている訳ではない。元々冴子は、あまりカッコイイ男に興味を持っていなかったからだ。
誰々が誰某と付き合っているとか、誰々がカッコイイとか性格が良いとか……　そんな事を知ったところで結局、恋と言うのは外見じゃ無い！！と思っていた。よって冴子は、そう言った情報に興味が無かったのである。
なので、まずは情報を集めるところから始める事に決めた。
こう言うのは智美の得意分野なのよね――――智美とは、冴子の中学校からの友達だったが、彼女は勉強などはそこそこなのに、こと、人様の恋愛問題に関しては異常なほどの嗅覚を発揮する。
その情報収集能力はＴＶレポーターもかくやと言われていて、一体どうしてそんな事を知っているのよ？と思われるような事を、握

っていると言う噂だった。
ただし智美自身はその情報を流して楽しんだりと言う事はないから、周囲から恨まれるような事は無く、いい男の情報が聞ける――――と、逆に人気がある程なのである。
冴子はそんな智美に、現在フリーで人気の高い男の情報を教えて貰おうと思っていた。
何故ならば――――どうせキスをするならば、その相手とはこれからつき合って行きたい。それならば……変な男を選ぶよりは、いい男とつき合うに越したことはない！と言う、ほんの少しだけ見栄っ張りな冴子の選択だった。
それに、もしも相手の男に彼女がいるのも知らず、そう言う関係になってしまったらそれはそれで問題だろう。
一番良いのは、自分がキスをしても良いくらいにカッコ良くて、しかも現在彼女がいないフリーな状態の男だ。少々難しい条件だが、だからこそ智美の情報能力がモノを言うはずである――――と、冴子は今日の昼食時にでも早速話をしてみようと思ったのだった。

玄関先で気合いを入れた冴子が家を出ると、門の所には既に竹田が待機していた。どうやら言いつけを守って家の外で待っていたらしい。少しだけ憔悴した顔つきをしている。
「お、おはようございます～」
竹田は冴子を見つけると、機嫌をうかがう様に挨拶をした。冴子の機嫌が悪かったら、あまり近寄らない方が良いと考えているらしい。笑い方が少々ぎこちないのはご愛敬と言ったところだ。
冴子は、そんな竹田を見ると昨日の事を思い出してムッとした顔になった。だけど……いつまでも根に持っていても仕方がないわね――――と、冴子は考え方を変える事にした。
そして、周囲に人がいないのを確かめてから、小さな声で挨拶を返した。
「おはよう。だけど、これからはあんまり声をかけないでよ。あん

たと話している所を見られでもしたら、また変な人間だと思われちゃうんだから」
「ううっ、解りました～」
「それに、学校の中に入るのは良いけど、教室までは入ってこないでよ。解った」
「ううっ……それも解りました」
竹田は素直に従った。
やけに素直ね。多少は申し訳ないって気持ちが出てきたのかしら？――――冴子は妙に素直な竹田を見て思ったが、本当は、ただ単に冴子のことが怖くて従っていると言うのは知らぬが仏である。
しかし、そんな事には気も止めず、冴子は学校へ向かって歩き出すのだった。

「おはよー」
冴子が教室に入ると、先に来ていた智美と昌代を発見して挨拶を交わした。
「おっす、冴子」
「あ、冴子、おはよー」
智美が手を挙げて答え、昌代がそれに続く。
「智美さ、今日のお昼ってどうする」
冴子は自分の机の上に鞄を置くと、智美と昌代の話の話の中に入った。
「なに？もう昼の話？やっぱり冴子は華より団子だよな」
「む、失礼ね。私が食べ物にしか興味無いみたいじゃない」
「だってなあ、昌代」
「え、何よ智美、私に振らなくても良いじゃない」
昌代は智美に話しを向けられて、困った顔で笑っている。
ぐっ、私ってそう見られてたのね――――冴子は普段、自分がどう見られているのか解った気がした。
「で、お昼がどうしたんだよ？」

「ちょっとね、智美に頼みたいことがあってさ、今日はパンでも買って屋上で食べながら話したいなぁ～なんて思ったんだけど」
そう、屋上ならば多少回りに人がいても話を聞かれる心配がない。それに多少込み入った話にもなるだろうし、出来るなら落ち着いた場所が良い。そうなると、教室や食堂などよりも屋上に行くのが一番だ――と言う三段論法に至った冴子は、早々に約束を取り付ける為に話を振ったのである。
「ん～話って何？まさか冴子が恋の悩みって訳でもないでしょ？」
「ぐっ、私じゃ恋で悩んじゃいけないわけ？」
「え？じゃあそうなの？本当に恋の悩みだったんだ」
智美と昌代は――意外だ、と言った顔で驚いた。
「そうよ、私だって恋に悩む女子高生なんですからね」
「じゃあ……とうとう裕太君に告白でもするの」
「って、どうしてそこで、あんな奴の名前が出るのよ！」
昌美の言葉に冴子は憤慨した。
「だって、ねえ智美」
「そうだよな。冴子の事を貰ってくれるのは、アイツくらいしかいないんじゃないのか？」
智美と昌代はお互いの顔を見てうなずいた。
「冴子、ケンカしたんなら、早めに謝った方が良いと思うぞ」
「うん、私もそう思うな。冴子」
「しかも、どうして私が悪いって思うのよ！それに、裕太なんか関係ないわよ　……あんな奴」
二人揃って裕太の事なんか言って――冴子は多少強がりながら否定した。
「ふ～ん、ま、それでも良いけどさ。謝るんなら、早めの方が良いと思うぞ」
「違うって言ってるじゃない。それよりも、お昼は屋上よ。昌美も」
「へいへ～い。解りました」
智美はおざなりな返事をした。

「え？私もなの？」
「そうよ、情報は多い方が良いからね。じゃヨロシクね」
冴子はお昼の約束を取り付けると、自分の席へと帰って行った。
「どうしたんだろうね、冴子……」
智美と昌代の二人は、突然の冴子の変わり様にお互いの顔を見合わせた。
「おおかた裕太とケンカでもしたんじゃ無いのか？それでいい男でも見つけて見返してやろうとかさ」
「う～ん、何となく当たってる気がするね……だけど、智美はこういう話大好きなのに、今回はあんまり乗り気じゃないのね」
昌代は、智美が冴子の話に乗り気じゃないのが不思議だった。普段なら、頼みもしないのに積極的に自分から情報を仕入れてくるのに、今回はそれ程興味がある様には見えなかったのだ。
「だってさ、結果が見えてるじゃん」
「どう言うこと？」
不思議そうな顔をしている昌代に、智美は当然と言った顔で答えた。
「だってさ、冴子が裕太以外とくっつく分けないじゃん。結局最後には、冴子がおれるかどうかして、裕太と一緒になると思うぞ」
それを聞くと昌代も、「う～ん、それもそうよね……」と、納得の表情で苦笑するのだった。

―――昼食―――

冴子達三人は、食堂でパンを購入すると朝の約束通りに屋上へ向かった。
冴子達の高校は屋上を解放していて、お昼どきや放課後など、生徒達が自由に利用できるようになっている。風が強い日などは砂埃が舞って敬遠される事もあるが、ぽかぽかとして暖かい時などは生

徒達からは人気の場所である。
　冴子は、適当に空いている所を見つけると、そこに座って昼食を食べながら早速本題に入った。

「率直に言うわよ智美……この学校でカッコイイって評判で、彼女のいない男の事を教えて欲しいの」
　それを聞いて、智美はコロッケパンを、そして昌代はチョココローネを取り落としそうになった。
「ちょ、冴子、それってどういう事？普通、誰々の事が好きなんだけど、その彼には恋人はいるの？とか、性格は？とか、そうやって聞くもんだろ」
「う～ん、なんと説明して良いやら……」
「冴子、やっぱり裕太となにかあったの？」
「ち、違うわよ昌代！あんな奴は関係ないんだから」
　冴子は手にしていた焼きそばパンにかじり付いた。
「いや、まあ、それならそれでいいけどな。だけど、どうしたんだよ急に、今まで男の事に興味なんて無かった冴子が、カッコイイ男を探してくれ……なんて」
「それもちょっと……」
　冴子は困った顔をするしかなかった。何せ、信じてもらえるかも知れないと思っていた裕太でさえあの反応だったのだ、智美や昌代に本当の事を話したとしても、到底信じてもらえるはずはない。
「ね、その辺の事情は聞かないで欲しいんだけど」
　冴子は両手を顔の前で合わせて拝む。
「う～ん、ま、それでも構わないけどさ」
「サンキュウ」
　持つべきモノは友達――――冴子は、なにも聞かないでくれる智美や昌代の事をありがたく思う。
「で、カッコ良くて、現在付き合っている彼女のいない男を教えろって？」

「そう、そうなのよ。出来れば3人くらいに絞って教えて欲しいんだけど、条件としては私よりも背が高くて、学力も学年のトップ30には入って欲しいわね。で、スポーツ万能、会話も楽しい人の方が良いかな、あ、もちろん周囲の評価も高くって……」
冴子はそこまでしゃべると、智美と昌代の冷たい視線を感じた。
「……ごめん、解ってる。痛い程解ってるからさ、その無言の視線は勘弁して」
二人の親友の、痛い程の視線に耐えられなかったのか、今度は小さくパンにかじり付いた。
「ま、とにかく冴子はカッコイイ男の情報が欲しい訳だ」
「本当にどうしちゃったの？冴子。変なモノでも食べたんじゃない？」
「まあね、ちょっと理由は言えないけど、教えて欲しいのよ……それから昌代、私は変なモノなんて食べてないわよ」
「じゃ、年上と年下じゃどっちが良い？」
「冴子、パンがこぼれてるよ」
「う～ん、やっぱり年上の方が良いかしら……え？どこにパンがこぼれた」
「スポーツ系と勉強系は？平均的な人もいるけど」
「あ、このクリーム、味が変わって美味しくなってる」
「そうねぇ、平均的に出来る人の方が良いかも。本当に？昌代、ちょっと一口ちょうだい」
「で、彼女がいない方が良いんだ」
「そうだ、昨日ね、やっぱり行ってきたんだアイスクリーム屋さん。美味しかったよ」
「そうよ、彼女がいる男にアタックする程悪趣味じゃないから。で、なに食べたの？」
女三人寄ればかしましいとは言うが……まさにマシンガンの様に言葉が飛び出してくる。
「それで冴子」

「んー？」
智美は冴子の方へと手を伸ばした。
「な、なに？この手」
「報酬。私の情報は質量共にクオリティーが高いからね、それなりの報酬を貰わなくちゃ」
「んぐっ」
冴子は、食べかけのコロッケパンを喉に詰まらせて、昌代から渡されたジュースで事なきを得た。
「なによ智美、その報酬って」
「なにって、当然だろ。私だって情報を取ってくるために色々と必要経費とかも掛かってる訳だし、ギブアンドテイクって奴。その変わり、私の名にかけて質の高い情報を教えるって訳。な」
「な、って、本当に報酬が必要なの！？」
「まあ、冴子が持ってるほかの情報でも良いけどさ、どうせ対した事を知ってる分けないし。手っ取り早く……」
「ちぇ～解ったわよ」
手を差し出してくる智美に、冴子は渋々と財布を取りだした。
「はい五円」
「って、何よこの五円玉」
「知らないの智美？ご縁がありますようにって、五円玉。これで智美もいい男見つけてね」
冴子はとぼけた顔で智美に言った。さしずめ智美が狐なら、冴子は狸だろうか　……昌代だけが、なに食わぬ顔でパンを食べ続けている。
「ったく、じゃ今回は貸しておくからな。で、男の情報だけど3人くらいで良いのか？」
「さすが智美、持つべきは友達よね～」
冴子が大げさに感謝の声をあげると、智美はやれやれと言った顔でため息をついた。
「出来ればさ、さっき言った感じで、色々とその人の情報を教えて

欲しいのよ。趣味とか好みとか」
「分かった分かった。じゃ、放課後までに3人をリストアップして紙に書いといてやるよ」
「サンキュー」
ふ～、これで男の情報はクリアーしたわね……今日は智美から教えて貰った男を確認しよう。明日は日曜日で学校が無いから、色々と計画を立てて、月曜日から行動を開始しなくちゃね。
冴子はそう考えると、残りのコロッケパンを一気に口の中へと放り込むのだった。

「さ、冴子さん～。お帰りですか？」
授業が終わって校舎を出ると、冴子は竹田から声を掛けられた。
どうやら冴子の言いつけを守り、学校の中には入らなかったらしい。
「あっ」
冴子はそんな竹田に返事をしそうになったのだが、周囲に人がいるのを思い出して何とかこらえる事が出来た。
「ちょっと……学校の中で話しかけないでって言ってるでしょ」
校門を出た所で、冴子は周囲には分からない程度の小声で話しかけた。
「す、スイマセンです～」
「ところで、どこ行ってたのよ……教室には入るなって言ったけど、あんまり離れた所にいたら、証人にならないじゃない」
「は、はい～実はですね～、廊下で待っていようと思ったんですけども、どうも霊感の強い方がいまして～私の事に気が付いた人がいたんです～。それでですね、その方がお祓いの方法などを心得ているらしくって、危うく神様の所へ逝かされる所だったんですよ～」
竹田は情けない顔でしゃべっていた。
「だって、あんた元々上の住人じゃない死神なんだから。お祓いさ

れたって元の世界に戻るだけでしょ。別に関係ないじゃない」
「いえ、私たち死神はですね～、こちらの世界で働く時には免許が必要なんですよ。それでですね～その免許が無いと強制的に上の世界に戻されてしまうんです～。お祓いはその免許の効力を無効にしてしまう効果がありまして～、死神だから効かないって事は無いんです～。ええ」

……

死神がこちらの世界で働くのに、免許がいるなんて――――冴子はなんと言っていいのか言葉を失った。
それもそのハズ、誰がどう考えても、死神がサラリーマンの様に働いていて、さらには神様がスーツを着ているなどイメージのしようが無い。しかも生き返る為の条件がキスなどと……神の性格を疑いたくなる。
「それでですね～、私達の免許を消されてしまって、強制的に上の世界に戻されてしまうとですね、再発行に色々と時間が掛かってしまうんです～。あの方から逃げるのに苦労しました～」
竹田はハンカチを取り出すと、額のあたりを拭った。汗を掻く死神というのも初めての光景だ。
しかし、冴子としてはそんな竹田には興味が無かった。目下のところ、智美にリストアップして貰ったカッコイイ男の、誰から最初にアタックするのか……その考えで頭がいっぱいだったのである。
「ふ～ん、大変そうね」
と、自分には関係のない話に、気のない返事をした。
「いや、これは冴子さんにも関係無いって訳じゃ無いんですけど……」
「ふ～ん、そうなんだ……って、それどういう事？」
「あのですね、冴子さんも今は死んでいる状態なので～こちらの世界に戻っている時には許可証が必要なんですけど～、それ、私が預

かってるんですよね～。それでですね～、私がお祓いされてしまうと、同時に冴子さんの許可証もお祓いされて強制的に上の世界に送還されてしまうんです～はい～」
竹田は事も無げに言うのだが、冴子としては寝耳に水の話に驚かざるをえなかった。
もし竹田がお祓いされてしまったら、自分も上の世界に戻らなければならないとは……しかも、許可証や免許の再発行には時間が掛かると言う事は、お祓いされてしまったら生き返る為の時間がなくなると言う事だ。文字通り、お祓いが即座に成仏へと繋がっている――――冗談じゃない。
「ちょっと、それどういう事よ！！」
「ええ、ですからですね～、霊感の強いお祓いを心得ている方から、私は逃げ回っていたんです～」
「そ、その霊感の強い人って誰よ？話を付けておかなきゃ危ないじゃない」
これ以上生き返る為に障害が増えちゃたまらない――――冴子は新たに加わった危機に頭の痛い思いだった。
「と、とにかく、その霊感の強い奴って誰よ！」
「ええっとですね～、何だか黒髪で、スリムな体型の女性の方でした～」
「って、それだけじゃ分からないわよ。私が話しを付けておくからもっと特徴とか覚えてないの？」
「ううっ、冴子さんは私の事を心配してくれるのですね～」
竹田は自分の事を心配してくれる冴子に感激した。自分のミスからこんな状況に陥ってしまったのに、そんな自分のことを心配してくれる彼女の優しさに、心が洗われる気がしたのだ。
がしかし、冴子は当然、竹田の事はどうでも良かった。
「そんな訳ないでしょ。あんたがお祓いされてしまったら、私まで生き返る事が出来なくなるじゃないの。あんた、死んでも私の許可証を守りなさいよ！」

……なんか寂しいです。
竹田は少しだけ、心の中に北風が吹くのを感じた。
「それで、その霊感を持った女の子の特徴は？」
「はい～黒髪で長髪でした～。それに」
「葛木冴子君だったよね」
「そうそう、女性の方でしたけど、自分の事をボクって呼んで、人の事を君って言う、男っぽい口調の方でした」
「ふ～ん、じゃ、隣の組みの彼女かしら……自分の事をボクって言う、ちょっと不思議な女の子がいるって聞いたことがあるけど。確か名前が、御影石斎（みかげいしいつき）さんとか言う……」
「ボクって呼ぶのが珍しいのかい？」
「そう言う訳じゃ無いけどね～」
「いえいえ、そんな訳では無いのですが……」
冴子と竹田は同時に答えると、声の方へゆっくりと振り返った。

ぎょ！――――冴子と竹田の表情が、凍り付いた。

「ひぃ！こここ、この方です～」
なんと真後ろに、斎本人がいたのである。竹田は思わず冴子の後ろに隠れた。
「あああああ、あの、斎さんだったよね、何故ここに」
「葛木君、君と死神の会話は聞かせて貰ったよ。最初ボクは、君が死神に取り憑かれていると思って死神を祓ってあげようと思ったのだけれども……」
「いいいい、いや、あのね、これには深い訳があってね」
冴子は、誰かに自分の状況を知って貰いたいとは思っていたが、お祓いされてしまうかもとは考えてもみなかった。こういう形なら、誰にも知られない方が良い――――と、冴子はコレまでの考えを否定した。
「大丈夫、なにも言わなくても解ってるよ」

しかし冴子の慌てぶりとは対照的に、斎は落ち着いている。
「あ、あの……何が分かっているの？」
「最初は、葛木君が死神に狙われているのかと思っていたけど、そうではなく、君は既に死んでいるんだね……しかも成仏出来ずにいたのを死神が迎えにきていたんだ」
「は？……あ、あの、話せば長くなるんだけどね、あの、私は死んでるけど、本当は死んでる訳じゃ無くて、生き返る為にある条件があって、その見届け役としてこの死神が私のそばにいると言うか……」
「良いんだよ分かってる。死んだ人は誰もが自分が死んでいないと思い込むものなんだ。幸い、ボクは少々お祓いを心得ていてね、君を……」
斎はここで言葉を切った。
「き……君を？」

ゴクリ———冴子は斎に見つめられて、思わず唾を飲み込む。

「成仏させてあげよう」「って！！ちょっと、人の話聞いてる？だから私は本当に死んでなくてね」
「うんうん……分かってる。でも成仏した方が幸せだよ」
斎は勝手にうんうんと頷くと、脇にかかえていたバッグから、お札の様な紙切れを取りだした。
「ちょ、まって、ほら、あんたも説明しなさいよ」
冴子は後ろに隠れている竹田を引き出した。
「いや、あの本当なんですよ。この冴子さんはですね～」
「死神までだませるなんて……葛木君、君は結構策士なんだね。ボクもお祓いのし甲斐があるよ」
「って！！冗談じゃないわよ」
「ひぃ！！冴子さん逃げましょう」
「じゃ、行くよ！！」

斎はお札を挟みながら両手を合わせると、何やら分からぬ呪文を唱え始めた。
じょ、冗談じゃない！こんなところで成仏してたまるもんですか！！――――冴子は呪文を唱え始めた斎から逃れようと思った……っと、その前に、一番危ないのはこの竹田だ。
「いい、逃げ切るのよ！！」
冴子は竹田の襟首を捕まえ、グッと腕に力をいれた――――と思ったら、ビルの屋上目掛けて竹田を投げ飛ばした。
「とりゃ！！！！」
「ひぇ～」
――――元々空を飛べる竹田は、体はソフトボールくらいの重さだったのだが、冴子に投げられると良く飛んだ。冴子が元々持っている力だったのか、それとも火事場の馬鹿力なのか……詮索は――――しない方が良いらしい。
これで竹田の方は大丈夫だろう……冴子はビルの屋上へと飛んでいく竹田を確認すると、後は自分だ！――――とばかりに、手に持っていた鞄を脇にかかえ直して全速力で逃げ出す事にした。
「あっ、お待ちなさい！」
斎が追い開けて来るのが分かったが、冴子は後ろを振り返る事もせずに必死に走った。
学校の体育の授業でだってこれほど必死になったことは無いのではないかと言うくらいの、全速力だった。タイムを計ったら、きっと人間の壁に迫る記録になっているに違いない――――冴子は、必死になって逃げている途中、ふとそんな事を思い浮かべていた。
だけど、どうして私がこんなトラブルに巻き込まれなくちゃならないの！？
次々に降りかかってくるトラブルに、冴子は我が身を呪うのだった。

後編の後編：あなたは運命の存在を信じますか？

「はぁ～はぁ～はぁ～」

息も絶え絶えとはこういう事を言うのだろう。冴子は大きく肩で息をしながら、やっとと言った感じで玄関の扉を開けた。ちなみに説明しておくが、決して冴子の体力が人より劣っていると言う訳ではない。霊感少女の御影石斎（みかげいしいつき）を巻くために、１０分以上も全力で走り続けていたのだ、息が切れて当然である。

「た、たらいま～」と、気の抜けた声からして疲れていた。

全く、どうして最近の私はこんなトラブルばっかりなのかしら！！間抜けな死神には１０７才のお婆さんと間違われるわ、スーツ姿の神様に変な注文をされるわ、霊感少女にお祓いされそうになるわ、今までの安穏とした生活が懐かしいわ……

冴子はキッチンでコップ一杯の水を一気に飲み干すと、重い足を引きずりながら自分の部屋へと戻っていった。

絶対に――――今週の運勢は大凶に違いない。それに大殺界に仏滅が重なって、きっと学校は鬼門の方角を向いてて、さらに星の巡りも最悪の軌道に入ってるんだわ……それ以外にこの不幸の連続は説明出来ないもの。

こういう時はどうすればいいのかしら？やっぱり神社に行って悪運を祓ってもらうのが良いのかしら？

普段、占いやおまじないと言った事を信じない方だったが、これだけ不幸が身に降り掛かってくると少しだけ信じたくなってくる。

だけど、頼む相手ってあの神様の事よね――――冴子はスーツ姿の神の事を思い出すと、何とも言えないやるせない気持ちになった。

「頼む先がアレじゃね……あ、そう言えば」

捕まらずに逃げ切ったかしら？あいつ。一応あれだけ投げ飛ばし

たなら大丈夫だとは思うけど……ドジの上にトロそうだから、今頃どうしている事やら　―――冴子はビルの屋上へ投げ飛ばした竹田の事を思い出して少し心配になった。
　するとちょうど、ドアをノックする音が聞こえてきた。

コンコン―――

「冴子さん～」
「ほっ、どうやら逃げ切った様ね。これで少しだけ安心できるわ」
　冴子は、竹田の情けない声を聞いてひとまずほっとした。そして、部屋のドアを開けたのだが……

ギョ―――

　ドアを開けた冴子は、一瞬の後に固まった。
「やあ、お邪魔させてもらっているよ」
　なんとそこには、首根っこを捕まれた竹田と斎綾乃が立っていたのである。
「捕まっちゃいました……えへへ」
　竹田が、恥ずかしそうに笑っていた。

「っっって！どうして綾乃さんがいるのよ！」
　竹田はビルの屋上を目掛けて投げ飛ばしたし、自分は自分で綾乃を巻いてきたハズだ。一体どうやって竹田を捕まえたと言うのだろうか。
「簡単な事だよ。君の走っていった方向にこの死神氏が逃げていくのが見えてね、その後を追いかけて玄関先で捕まえたのさ」
　クール、クールよ斎さん。
　バカ死神！―――それを聞くと、思わず竹田の事を睨まずにはおけない。

「ひっ！ささ、冴子さん許してください～」
「って許せる訳無いでしょう！！１０７才のお婆さんと間違うわ、あんたに話しかけたおかげでクラスメートには変な目で見られるわ、私の着替えものぞくし、あまつさえ、斎さんを私の家に案内して捕まるなんて」

―――

「はぁ～もう、どうにでもしてよ……」
冴子は珍しく弱音を吐いた。
そして「もう良いわ！お祓いするならさっさと済ませてよ」と言うと、ベッドに倒れ込み、煮るなり焼くなりどうにでもして！と言うと、大の字に手足を伸ばした。
「あの、冴子さん～？」
「あんたは黙ってなさいよこの間抜け死神！さあ、私はもう逃げも隠れもしないわよ」
さあ！さあ！―――冴子は目をつぶりながら、首を左右に振った。
「葛木君は、噂どおり面白い人なんだね」
「ええ、そうなんです～」
「って、あんたが言うな！」
「ひぃ！」
冴子のすさまじい表情に、思わず竹田は首をすぼめた。
「葛木君」
「な、何よ斎さん、このバカ死神をお祓いするならすればいいじゃない。私はもう覚悟は出来てるわよ！」
冴子はまたもやベッドの上で大の字になった。
「そうかい？お祓いするのは止めようと思ったんだが……葛木君がそう言うならボクは遠慮しないけど」
「って！ちょっと待って。ちょっと待ってよ……今、止めたって言った？」

「そうだよ。ボクはお祓いを止めようと思った、って言ったんだ」
「そ、それって、どう言うこと？」
斎の思いがけない言葉に、冴子はベッドから飛び起きた。
「あのですね冴子さん～、私がこの方に捕まった時にですね。今までの事とか、神様から貰った契約書を見せて説明させてもらったんです～。その結果ですね、御影石さんも納得していただいた様で、お祓いは思いとどまってくれたと言う訳なんです～」
未だに首根っこを掴まれたまま、斎に印籠の様に突き出された格好で説明した。
「じゃ、じゃあ斎さんは私の立場とかを分かってくれたって事？」
「そうだよ。ボクだって理由さえ分かればお祓いなんて事はしないさ」

って、その割にはさっき、理由とか聞いてくれなかったけど……

「何か言ったかい？」
「え？いや、ははは、何でも無いのよ。ははは」
愛想笑いが虚しかった。

「で、でも、それならどうしてこのバカ死神を捕まえて家に来たの？」
「ああ、ごめんよ死神君……」
斎は今気が付いたと言った風に、竹田の首から手を離した。
「彼がボクから逃げ出そうとしたんでね、思わず捕まえていたんだよ」
「そ、そう……それで、どうして私の所へ？もう理由が分かったのなら、あの、そっとしておいて欲しいんだけど」
何せここ最近、自分に近づいてくる人間（じゃ無い者もいるが）は、ことごとくトラブルを持ち込んでくる、出来るならこれ以上のトラブルは遠慮したい　―――冴子は心の底からそう思っていた。

「ふむ、ボクも、もう君たちをお祓いする気はないんだが、実に珍しい被検……　イヤ、珍しいケースだからね、もう少し詳しい話を聞いてみたいのさ」
　被検？被検体って、クールな顔をして斎さん……でも、話だけで帰ってくれるならさっさと済ませて帰ってもらおう。妙に居座られてトラブルを巻き起こされるよりは絶対に良い。
　冴子は事の起こりから、今までの事を説明する事にした。
「で、このお馬鹿死神のせいで、私は後６日って言うか、今日を抜かせば後５日の間にキスをしなくてはならなくなったのよ」
　どう考えたって私には悪い部分なんて無いじゃない。そりゃ、この死神をタコ殴りにしてしまったのは悪いかも知れないけど、それだって私を１０７才のお婆さんと間違ったりしなければ問題は無かったのだ。やっぱり、トラブルの原因はこのへっぽこ死神にある！
――――冴子は事のあらましを改めて斎に説明していく内に、やっぱり悪いのはこのへっぽこ死神じゃない！と、最後には竹田の事をジロリと睨んでいた。

「ふむ、悪いのはこの死神君なんだね」
　冴子のキツイ視線に続き、斎のクールな視線も重なって竹田は身を縮めるしか無かった。
「うう、済みません」
「そうよ斎さん、分かってくれる？この死神が諸悪の根元だって」
　冴子は、こんな突拍子も無い話を信じてくれる人が周りにいなかったので、理解してくれるだけで嬉しかった。
「分かるよ、葛木君の話が嘘じゃ無いって事」
　霊感の強い斎だから信じてくれたのだろう。一時はどうなるものかと思ったが、今では斎の特異体質に感謝しても良いと思った。

しかし――――

「それじゃやっぱり悪の根元である死神君をお祓いした方が」
「って、そうしたら私まで成仏しちゃうじゃないの！！」
「そうか、そうだったね」
分かってて言ってるんじゃないでしょうね――――冴子は、やっぱり先程の考えは間違いだったと思い直す事にした。
「と、とにかくそんな訳で、当分の間はそっとしておいて欲しいのよ」
冴子は、早くこの悪夢の様な状況から解放して欲しいと、切実に思った。
「分かったよ……それじゃ今度からは、ボクも死神君を見つけてもなにもしない事にするよ」
斎は、それじゃと言って立ち上がった――――どうやらおとなしく家に帰ってくれるらしい。
「お邪魔したね」
「それじゃ、また学校で」
ほっ、これで一つ、トラブルが無くなるわ――――冴子は玄関まで案内すると、斎が帰るのを見送ろうとした。
「葛木君」
「な、なに？」
「お祓いが必要になったらいつでも力になるからね」
「だからそれじゃ私が成仏しちゃうんだってば！！」
斎はクールな表情でそれだけ言うと、「それではごきげんよう」と言って玄関を開けた。
「はぁ～もお！どうして私の周りには変な人間が集まるのかしら」
「類は友を呼ぶ、ってやつですね～」
「って、あんたが言うな！！！」
冴子は思いっきり、竹田の脛を蹴っ飛ばしてやった。

――残り5日・日曜日――

時計の針が１０時を回り、平日ならば2限目の授業が終わる頃、冴子は未だ布団の中で春眠をむさぼっていた。何せここ二日、色々な事が多すぎて疲れていたのである。

特に昨日などは、普段なら絶対にしないマラソンをさせられると言う散々な目に遭い、それから、智美からもらった『いい男のデータ』を見ていたので眠りについたのも遅かったのである。

行動を開始するのは明日からとしても、色々と検討して作戦を立ておきたかったのだ。

「だけど……」

冴子は智美からもらったデータを眺めながら、その細かさに驚いた。

まず名前や生年月日などの基本的な事から始まって、血液型や星座、今は何組に居るのか、そして部活は何をやっているのか。身長と推定体重もあったし、学力の推移や周囲の評価など、まさに至れり尽くせりだった。

それに何時撮ったのか、顔が写っている写真も添付されていて、智美がクオリティーの高さを誇るのも素直にうなずけた。

もちろん、冴子が一番知りたかった、相手の女性に対する好みの傾向なども細かく書かれていた。短期決戦を強いられている冴子にしてみれば、これほど頼りになる資料は無い。

とは言え……冴子の中では、どこかやるせない思いが強かった。

何故ならば、冴子はどちらかと言うと、運命的な出逢いから始まる燃え上がる恋愛という物にあこがれていたのだ。意外とロマンチストなのである。

だからこの様な、計画的で、少し打算的な恋愛などは余りしたくなかったのだが……しかしそれ以上に、成仏したいとも思っていなかった。今は贅沢を言っている場合ではない。

「さてと、どうしますかね……」
冴子は5枚の写真を前にして悩んでいた。
3人くらいと頼んだのだが、どういう訳か、智美がくれたレポートには5人分情報が載っていた。
「ルックス的には全員私の好みなのよね……」
智美が選んでくれたのだが、どうして、5人ともレベルが高い。その中でも3人程自分の好みに合った男がいた。
一人は現在三年生の先輩で、バレーボール部の山本健介（やまもとけんすけ）だった。バレーをやっているだけあって長身で、学力も普通程度にはあるらしい。
その次は、秋山隼人（あきやまはやと）と言う、こちらも三年生の先輩だった。特に部活はやっていないが短距離が早く、勉強は中の上。妹思いのお兄さんタイプと書いてある。
最後は、内藤昌夫（ないとうまさお）。同じ二年生だが、クラスが遠いので見たことがない。サッカー部でレギュラーを取っている俊足だが、学力はそこそこ。少し自信家であるが、財閥系の御曹司でお金持ちと書いてある。
後の二人も、優しそうな顔付きで好感が持てた。
一人は冴子も知っている同学年の甘利虎弥太（あまりこやた）だった。彼は甘いマスクで母性本能をくすぐるタイプで、年上からモテルタイプと書かれている通り、実際年上の女子からもてはやされているのは知っていた。
が、冴子はどうもこういう軟弱なだけの男は好きになれなかった。別にケンカが強いとか言う基準ではない。冴子はケンカというモノが嫌いで、自らの力をひけらかす男など論外だと思っている。
だからこの場合の軟弱というのは、精神的な強さの事を言っているのだが、他人に流されたりせずに自らの決めた事を貫き通す様な、内に秘めた強さを持っている人が好みなのである。冴子の基準から

言うと、甘利虎弥太にはどうしてもそれを見つける事が出来なかったので、対象からは外すことにした。

そして最後は、安田優樹という一年生だった。スポーツこそ出来ないらしいが、パソコンが得意らしく勉強も結構出来るらしい。智美の調査では、優しい性格で周囲から好かれるタイプと書かれていたが……冴子はどうも年下と言うのが引っかかり、こちらも選考から一時外す事にした。

と言う訳で、結局狙う相手は前述の山本、秋山、内藤の三人にしようと思ったのだが……冴子は少々疑問に思えた。どう見ても、同学年ばかりか下級生などにも広くモテそうな三人なのだ。現在彼女がいないと言うのが不思議に思えてしまう。

「ま、たまたまって事かしらね……」

少々引っかかるが、しかし、相手に彼女がいない方がこちらとしては好都合なので、それ以上深く詮索するのは止めた。

「さてと……どうしようかしら」

冴子はもう一度三人の候補を見て検討していた。

好みとしては三人ともに申し分無い。現在付き合っている女性がいないのが不思議なくらいの容姿なのだから、その点では申し分ない。

だとすると……残るは性格よね。やっぱりこれから自分の彼氏になってもらう人を選ぶんだから、性格の良さが重要になってくるわ。

冴子は三人の性格に関する部分を比較する事にした―――のだが、しばらくすると「よし！決めた」と、サッパリした性格の通り思い切り良く決めていた。

勉強が出来るお兄さんタイプの秋山さんを最初に、次にはスポーツマンの山本さん、そして最後に、まあ最初の一人で大丈夫だとは思うけど……三番目は内藤さんにしよう！

一人だけでも十分なんだけどね――と、冴子は強気に思う反面、やはり保険は必要だと思って三人の順序を決める。
そして、決めたと同時に、相手の好みを研究し始めた。
妹思いの秋山さんは……資料を見ると柑橘系の匂いが好きなのね。それじゃコロンを柑橘系にして、妹思いの性格だから少々甘え気味に迫った方が良いかしら？
それからスポーツマンの秋山さんは、どれどれ、ストイックな性格で女性を紳士に扱うタイプ……か、それなら少々強引に色仕掛け――は無理としても、ドンドンと迫っていった方が良いのかも。
最後の内藤くんはサッカー部なのよね。お金持ちだからプレゼントとかはあんまり喜んでもらえそうにないタイプね。さりげなくスポーツドリンクとかを渡す清純派の方が良いかしら……

う～ん――冴子は色々と考えていたのだが、少し、虚しさを感じる。
「いいえ！これは生き返る為に必要なのよ！それにカッコイイ彼氏を作って、アイツを見返してやるんだから……」
冴子は虚しさを追い払うかのように言って自分を励ました。
「明日は買い物に行こう。コロンとか必要になるだろうし、街にいる可愛い女の子を見て研究しなくては」
時計を見ると、夜の1時を過ぎようとしていた――

――残り4日・月曜日――

その日の朝も、目覚まし時計をチョップで黙らせる事から一日が始まった。親友でもある昌代などは、低血圧気味で朝が苦手だと言っていたが冴子にその心配は無い。
目覚ましと共にスッキリと起きられるタイプだった。
「よし！昨日考えた作戦を実行するわよ！！」

と、朝から気合いが十分に入っていたのは言うまでもない。
昨日の日曜日、冴子が目覚めたのは昼の十二時だった。それから食事を取り、買い物をするために街へ出た。そして買い物を終えると、甘味処に立ち寄ってお汁粉を食べながら今日の計画を立てた。

第一の目標である秋山隼人には、「妹思いの良いお兄さんで柑橘系が好き」と言う智美の情報を元に、いつものフローラルな香りから柑橘系のコロンに変える事にした。そして相手との接触には直接会うのを避け、手紙と言う小道具を使う。
文面を少々可愛らしくして、お兄さん心をくすぐろうと考えたのである。
そして呼び出すのは放課後の屋上。清純派の後輩から手紙をもらい、屋上で告白されると言うシチュエーションに、お兄さん魂が萌えないはずはない！――――　冴子は自分の作戦に自信を持っていた。

「とにかく生き返る為よ！！」
冴子は鼻息も荒く、握り拳を作るのだった。

「あの……私二年の葛木冴子って言います。先輩、この手紙読んでください」
冴子は両手で手紙を差し出すと、恥ずかしそうな表情を作ってその場から駆けだした。
もちろん「清純派の後輩」を演出したことは言うまでもない。
二限の後の休み時間、冴子は昌代に協力してもらい、秋山を呼び出してから手紙を渡したのである。
「もう、こっちの方が恥ずかしかったんだからね」
最初昌代は嫌がっていたのだが、そこを何とかお汁粉2杯で買収すると、嫌々ながらも手伝ってくれたのだ。
「ごめん、恩に着るからさ。それに後は自分でやるから」
冴子はそう言って手を合わせる。

後は放課後に、最後の仕上げをするだけね――――冴子はそれを思うと、少しだけ自分でも緊張するのが分かった。

――――放課後――――

「で、昌代……どうして付いてくるわけ？」
「え？だって、ねえ、ほら、あの……」
「つまりは見物したいわけね」
「別にそう言う訳じゃないんだけどね」
昌代がそう言って「えへへ」と笑った。

あーもう！昌代ってば憎めいないんだから！――――そんな昌代を見ると、冴子は声に出して笑うしかない。
昌代は元々おっとりした優しい性格の持ち主なのだが、小柄で、可愛らしい洋服が似合う女の子であった。身長が低いせいもあるのか、少し見上げるような瞳が妙にいじらしく写って「守ってあげたい」と言うイメージを受ける。
冴子がたまに、昌代の事を妹の様に思えるのはその為であった。
とは言え、昌代も女の子である。色恋沙汰、しかも友達の冴子の事となれば、興味が湧かないはずがない。途中までで良いから――――と、無理矢理ついてきたのだ。
最初冴子はそれを拒否していたのだが……昌代の見上げるような瞳に見つめられると、結局、しぶしぶながらも許可するしかなかった。
「だけど、屋上までは付いてこないわよね」
しかし、だからと言って、自分が告白する所まで付いてこられてはたまらない。冴子は一応、釘を差しておく事にした。
「うん、近くでまってるからさ、結果を聞かせてよ」

それでも近くまでは来るらしい。冴子は、昌代が普通の高校生並みに好奇心を持ち合わせている事に苦笑するしかない。
「う～ん、ま、良いけどね……」
手伝ってもらった手前、無碍に断る訳にもいかない。それに、どうせ後でばれる事だから別に断る理由も無い。
そんなやりとりがあったが、冴子と昌代は校舎の5階からさらに上に登って、屋上へ出る扉の前まで来ていた。

「じゃ、行って来る」
「冴子、頑張ってね」
手をひらひらと振る昌代はここで待つことなり、冴子はいざ！秋山の待つ屋上へ向かうことになった。

2分後

ガチャ―――

屋上へと続くドアが、不意に開いた。
「昌代……」
「ど、どうしたの冴子、あの……早いじゃない。秋山さんいなかったの？」
昌代が驚くのも無理はない、先程冴子が屋上へと向かってから2分程度しか立っていないのだから。しかも、冴子が複雑な表情をしていれば、悪い想像が浮かぶと言うモノ。
しかし、それにしては表情がおかしい。振られたり秋山が屋上へ来ていなかったりしたら、もう少し悲しそうな表情をしそうなのに、冴子の表情はなにやら、やってられないわよ―――と言った、脱力した感じだったのである。
「いたわよ……しかも、スッゴク乗り気で」

「え？え？どういう事？」
秋山が屋上に来ていて、しかも凄く乗り気と言うことは……冴子に取っては喜ばしい事ではないのだろうか？昌代はまたしても訳が分からなかった。

「とにかく、とにかくちょっと来てくれない？」
昌代は全く訳が分からないまま、冴子に連れられて秋山の前に引き出される事になった……すると
「やあ来てくれたんだね昌代ちゃん！ボクの名前は知ってるよね、秋山隼人って言うんだ」
昌代が目の前に現れるや否や、秋山は昌代の両手をガッチリと握り、イキナリ迫ってきたのである。
「ボクは一目見た時から君のことが忘れられなかったんだよ。どうだい、ボクと付き合ってくれないかな。お兄ちゃんが何でも欲しい物買ってあげるよ。洋服が良いかな、昌代ちゃんならフリフリの付いたロングのワンピースとかきっと似合うはずだよ……」
秋山の猛烈な勢いに圧倒された昌代は、一体自分に何が起きたのか分からなかった。
「じゃ昌代……後はよろしく」
冴子はそんな様子を見ると、校舎の方へと踵を返す。
昌代は訳が分からなかったが、秋山にガッチリと手を握られていて逃げ出すことも出来ない。
「ちょ、冴子？どういう事！冴子ー！！」
そう、秋山は「妹思いの『良い』お兄さんタイプ」では無く、「妹フェチの『危ない』お兄さん」だったのである。
後に聞いた話では、実の妹からも敬遠されるほど「良いお兄さん」らしく、その実の妹から相手にされなくなると、学校の妹っぽい娘に矛先が向けられているのだそうだ。
小柄で可愛らしい「妹タイプ」の昌代が、秋山の属性にフィットしないはずがない。秋山は昌代に会った瞬間、一目惚れしてしまっ

たのだった。

――――残り3日・火曜日――――

その日の朝も、目覚ましにチョップを加える所から一日が始まった。

しかし、チョップを加える手にいつもより力が入っていたのは、昨日の出来事のせいだろう。

智美の奴、絶対知ってたに違いないんだわ！――――文句の一つでも言ってやらなくちゃ収まらない、と、冴子は朝からカッカしていたのである。

ダン――――

「ちょっと智美！あれはどういう事よ。あんた知ってて騙したでしょう！」

「わっ、びっくりしたな」

教室に智美の姿を見つけると、冴子は両手で机を叩きながら迫っていた。

しかし智美の方はと言えば、冴子だと分かると昨日の出来事を既に知っているのか、顔を見るなり笑い出していた。

「あはははっ、昌代から聞いたよ。秋山さんにアタックしたんだって？」

智美は満面の笑みを浮かべながら、してやったりと言う顔だった。

「って、何が妹思いの良いお兄さんなのよ。アレじゃ単なる妹フェチの危ないお兄さんじゃない！」

冴子は今思いだしても腹が立った。

「それは主観の問題だぞ冴子。私の調査報告書は真実一路、嘘は書かれてないはずだからな」

「うっ、た、確かに嘘じゃ無いけど……だけどアレは非道いわよ！」
「そうよ……非道すぎるわよ」
「そうでしょ、そう思うでしょ昌代も……昌代！！」
しまった！昌代のことを忘れてた！！――――冴子が振り返ると、そこには置き去りにしてきた昌代が不動明王もかくやと言う憤怒の表情で立っていた……のだが、どこか可愛らしく見えるのはご愛敬。

「さ～え～こ～」

ひぃ！――――冴子は少し、竹田の気持ちが分かった気がした。

「責任取りなさいよね！冴子」
「ま、昌代……元気だった？」
「何が元気だった？よ。あの後大変だったんだから！」
おとなしい昌代にしては珍しい程の迫力に、冴子は思わず逃げ出したくなった。
何でも、あの後何とか秋山を振りきって逃れる事が出来たらしいのだが、どこでどう調べたのか、家に花束を持ってこられたり電話を掛けられたりと大変だったらしい。温厚な昌代が嫌がっているのだ。それは相当なモノに違いなかった。
今朝も校門の所で待ち伏せされて、迷惑したとか……
結局冴子は、昌代の怒りをなだめる為にお汁粉2杯にジャンボパフェとトリプルのアイスクリームをおごる羽目になってしまった。
「ったく、智美に騙されたわ！」
確かに調書には書いてないが、アレは少し非道すぎる……しかし、怒っていられるのも生きている内だけだ。冴子は頭を切り換えて次の目標に切り替える事にした。

冴子が次に選んだのは、スポーツマンで長身の山本健介だった。
今度は大丈夫よね――――冴子は智美の資料を眺めながらそう思っ

た。
山本はバレー部のレギュラーとして活躍しているが、女性にちやほやされても図に乗らず、紳士的に接するタイプと書いてある。よもや、妹フェチ見たいな危ない性格の持ち主では無いだろう……いや、そうあってもらいたい。
冴子はこの山本にアタックする方法として、やはり手紙を使う事にした。呼び出すのはクラブの時間には無理があるだろうから、二限目の15分の休み時間にする事にして、場所はスポーツ系ラブロマンスの王道とも言うべき体育館裏だった。
相手は女性に紳士的に接するタイプという事だから、少し強引に迫っていくのも良いかも知れない――――冴子は早速山本に手紙を渡し、一限の休み時間には体育館裏の下見までして、計画の成功へ向けて気合いを入れていた。

「うっし！やるしかない」
そして、二限の授業が終わりを告げたのである。

――――キーンコーンカーンコーン

「ひえー急がなきゃ」
冴子は一段抜かしで階段を駆け下りていた。
いつもは正確に、チャイムと共に終わる数学の授業が、今日に限って時間をオーバーしてしまったのである。
あ、でも、待ち合わせの場所に遅れまいとして一生懸命走っている姿って言うのも、それはそれで好感を持たれるのかも――――冴子は転んでもタダでは起きないタイプだった。
しかし、遅れるにしても限度がある。冴子はくだらない想像は止めて、本当に急ぐことにした。
体育館ならば、校舎の一階と二階から繋がっている渡り廊下を歩

けば直ぐの距離なのだが、体育館の裏に行くには靴を履き替えなくてはならない。ここでも時間が掛かった。
冴子は素早く靴に履き替えると、体育館の裏に行くには昇降口をでてから校舎の裏側を通った方が早いので、そちらを小走りに急ぐ。
「来てくれるかしら……」
手紙を渡した時、冴子には相手が決して嫌がっている様には見えなかったので多分来てくれると思ったのだが、その時、少し変な視線を感じていた。
多分、山本と同じクラスなのだろうが、ちょっと線の細い美少年っぽい男が、手紙を渡している時にこちらを睨んでいる様に思えたのだ。
その時は別に気に止めなかったのだが……今思うとその視線は妙に絡みついて気持ちが悪いと言うよりも怖いくらいだった。
「ま、いいか」
しかし冴子は、またしても深く考えるのを止めて、目の前の計画を成功させるべく体育館の裏手に急いだ。
そして後少し――――という所で、普段は人気のない体育館の裏から、男同士で何かを言い争っているのが聞こえてきた。

どうしたのかしら？――――冴子が気になって、声のする方をそっとのぞいてみると……なんとそこには、呼び出した山本と、あの怖い視線を向けてきた美少年がいたのである。

「非道いじゃないか！あんな女の呼び出しに応じるなんて！！」
線の細い男が山本に向かって、何やら怒りをぶつけている。山本の方はと言えば、それを苦しそうな表情で聞き、必死に何かに耐えている感じだった。
「俊文（としふみ）俺だって苦しいよ。でも俺たちこのままじゃ……」
「イイじゃないか、言いたい奴には言わせておけば良いんだよ」
どうやら線の細い美少年は俊文と言う名前らしい。山本と美少年

は真剣な眼差しでお互いを見つめていた。
ちょっと……ちょっと何だか怪しい雰囲気なんだけど……これって、あの、噂に聞く……アレって事！？
冴子は二人の間に流れる怪しい雰囲気に、直感的にある想像が頭の中をよぎった。
すると、次の瞬間、冴子の想像が正しい事を、何とも衝撃的な映像と共に知る事になる。
「俊文！俺が悪かったよ」
「分かってくれるかい健介。もうボクを離さないでくれ」
なんと、二人の男がきつく抱き合いながら、相手の唇を奪い合うような強烈なキスシーンを演じたのである。
話しには聞いていたモノの、この様な衝撃的なシーンに直面したのは初めてで、一瞬、めまいが起きて気が遠くなった。
な、なんて事！！――――冴子は同性愛を否定するつもりは無かったが、まさか、自分が告白をしようとしていた相手が、線の細い美少年とキスをしているシーンを目撃するとは思っても見なかった。
既に、何も考える力は残っていない。
冴子はノロノロと、足取りも重くその場を離れるしかなかった……

――――残り2日、水曜日――――
その日の朝も、目覚まし時計にチョップをするところから始まった……が、しかし、昨日よりも、チョップをする手に力が入らなかった。

冴子は昨日の衝撃的な出来事が未だ後を引いているのである。
「さ、冴子さん～、何だかやつれてませんか？」
と、竹田が心配した程、寝不足の顔そしていた。
「ちょっとね……衝撃的な場面を……目撃してね……」
案外私もデリケートなのね――――冴子は夢にまで見て、昨夜はよく眠れなかった。
「おはよ～」
冴子は教室にはいると、挨拶も早々に、早くも腕を枕にして眠りたい衝動に駆られていた――――いや、実際に一限の授業は夢の中だった。

「あはははははっ！　だっけど、よくよく冴子も人を見る目が無いよなぁ～」
屋上でいつものメンバーが一緒に昼食を食べている時、冴子が昨日の出来事を話すと、智美はケラケラと無遠慮に笑い転げた。
「良くそんなに無遠慮に笑えるわね。元はと言えばあんたがくれた資料を見たんじゃない。いわば諸悪の根元は智美、あんたよ、あんた」
「分かった分かった。笑ったのは悪かったよ」
と言いつつも、こみ上げてくる笑いを抑えるのに必死な様子。
「だけど、今回の事に関しては全く知らなかったんだぜ。本当に」
智美はそう言ったが、冴子としては秋山のこともあるので全てを信じる事は出来ない。
「イヤ、本当だって。周囲でもそれらしい噂も無かったしさ、よっぽど上手く隠れて付き合ってたんじゃないのか？」
「でも、凄いシーンを目撃したよね」
昌代は秋山の一件で冴子に非道い目に遭わされたのだが、おおむね同情的だった。
「まあね、あれ以上衝撃的な出来事って、そうざらにはお目にかかれないと思うわ」

確かに最近、死神にあったり神様に会ったりと衝撃的な出来事が多かったけどね……だけれども、それとは別の次元でショッキングな出来事だったわ――――冴子は心の中でため息を付いた。

「で、結局山本さんには会わなかったの？」

「あったり前じゃない、あんな衝撃的なシーンを目撃しちゃったのよ、会って話しなんてとんでもないわよ。まあ、ある意味告白する前だったから良かったモノの、ちょっとね……」

「ふ～ん、冴子でも疲れるって事あるんだな」

「智美、それどう言う意味よ」

「いやいや、別に意味は無いんだけどな。でも、これで当分彼氏作りは止めるんだろ？」

智美は当然、冴子がこの一件で当分の間は彼氏作りを中止するのだろうと思っていたのである。元々こんな事をしているのも、意中の人がいて、その人をゲットする為と言う訳ではない。ただ単に彼氏が欲しいと言うだけの事だ。

今度の事で懲りているだろうから、少し時間を掛けるなり一時中断するのが当然と思った。

しかし、冴子がこんな事で諦めるはずはなかった。精神的にも肉体的にも疲れてはいたが、自分が生き返れるかどうかの瀬戸際なのだ。次のターゲットへアタックするべく、既に気持ちを切り替えていた。

「私は諦めないわよ。今度はサッカー部の内藤君にアタックするつもり……」

「って、おいおい、なんでそんなに彼氏作りに拘るんだよ。少し時間を掛けた方が良いんじゃないのか？」

「うん、私もそう思うな。冴子らしくないよ……何だか凄く焦ってるみたい」

そうよ、私は焦ってる。明日までにキスが出来ないと、私……私

はこの世界から消えてしまうのよ！！――――冴子は大きな声で叫びだしたい衝動に駆られ、のど元まで言葉がでかかった。
私だって本当ならこんな事したくない！だけど、私には時間が無いのよ！！裕太だって……裕太だって信じてくれなかったから――――

「おい、冴子？」
「どうしたの……なんだか変だよ冴子」
思い詰めた表情で黙り込んでしまった冴子を、昌代と智美の二人は心配そうな顔でのぞき込んだ。

……

「あははっ、ビックリした？心配しちゃった？」
冴子は、そんな二人にわざとおどけた態度で笑顔を作って見せた。
「冴子？」
「やーねー昌代、なに心配してんのよ。大丈夫、そりゃ連敗続きでちょっと疲れてるけど、タダそれだけだから」
努めて明るく振る舞う姿に、智美と昌代は納得のいかないモノを感じていたが、冴子の性格を知っているせいか、それ以上聞くのを止めた。冴子は意地っ張りで見栄っ張りで、余り他人に弱みを見せたがらないのだ。その点頑固なので、聞いても無駄なことだと分かっていた。

だけど、本当に困った時は相談してよね。友達でしょ――――と、二人は無言のまま心の中で冴子に声を掛けるしかなかった。

「さてと、落ち込んでばかりもいられないわね」
残り日数も今日と明日の二日しかない、落ち込んでいる暇は私にはないのだ　――――と、冴子は最後まで生き返る為に頑張ろうと、いつもの様に気合いを入れた。

しかしそれは、精神的に参っている事の裏返しでもある。
冴子は元々明るく元気で行動的で、自分のやるべき事は例えどんな結果になろうともやっておくべきだと考える前向きな性格の持ち主だった。彼氏作りの為に智美から情報を集めたり昌代に手伝ってもらったりと、今までの行動がそれを証明している。
しかし、今回に限って言えば、冴子は消化不良にも似たどこか納得のいかないわだかまりの様な感覚も捨てきれずにいた。
それもそうだろ、そもそもが人違いから巻き込まれた事であり、全くと言っていい程自分に非がないのだ。それに、いくら生き返る為だとは言え、キスをする為に彼氏を作ると言う理由は、冴子に取って納得の出来る事では無かった。
ともすれば、彼氏作りへの気力が手の中からこぼれ落ちる水の様に、消えて無くなりそうだった。
しかし冴子は、それ以上に受け入れがたい事があった。

もし自分がこの世から消えて無くなってしまったら――――

その思いがとてつもなく大きかったのである。
冴子はなんと言っても、他の17才の女の子と同じごく普通の女子高生なのである。そんな冴子に、自分の存在が消滅してしまうかも知れないと言う恐怖は、大きすぎた。
今現在の冴子を支えているモノはと言えば、持ち前の負けん気と意地だけだったろう……しかしそれは、いつ崩れてもおかしくない、危ういモノでもあった。

「取り敢えず今日は内藤君に当たってみよう。昨日のショックから段取りを取る余裕が無かったけど、こうなったら当たって砕けろってね、やるだけやるしかないじゃない」
何かに向かって走り続けなくては、とても恐怖心と戦えない――――冴子を突き動かす物の一つは、その恐怖心だった。

内藤君ってサッカー部だから、グランドに行けば会えるかしら？
冴子はすぐさまグランドへ向かう事にした……しかし
「え？今日は練習が無い！」
グランドを見渡したが、サッカー部の姿は一人も見えなかった。
それもそのはず、その場にいた陸上部の人間に聞いたところ、どうやら今日は練習が無い日だったらしく、サッカー部員は全員帰宅してしまったと言うのだ。
「ど、どうしよう……」
まさか今日に限ってサッカー部が休みだなんて――――冴子は運動系のクラブでは無いので知るよしもない。
どうにかしなくちゃ……これでは丸々一日を無駄にしてしまう事になる。
冴子は智美からもらった資料をもう一度見返した。
内藤を抜かすと、後は甘利虎弥太と安田優樹の二人だけである。
しかし、冴子は軟弱な男が嫌いだったのでどうしても甘利は選びたくなかった。安田優樹にしても後輩という事で今回は遠慮しようと思っていたのだが……冴子は安田優樹のメモに目を通した。

新入生だから中学校時代の友人から調査したのだろうが、優しい性格で周囲からの評判も良好と書かれている。
両親が仕事で海外へ長期出張に出ている為に妹と二人で暮らしていたらしいが、その妹も、全寮制の中学へ編入して今はいないらしい。現在は一人暮らしをしていて、以外としっかりした一面を持つと書かれていた。
とにかくあって話しだけでもしてみよう――――冴子は貴重な一日を棒に振るよりは何かしていた方が良いと言う思いから、後輩ではあったが、安田優樹に会ってみようと考えた。

会うのなら、急がなくちゃ。

放課後になってから結構な時間が経っている。もしかしたら家に帰ってしまっているかも知れない微妙なタイミングだったので、冴子は紙に書いてあるクラスへと急いで向かう事にした。

「あの、安田君よね」
「はい？」
どうやら絶妙のタイミングだったらしい。友達と話でもしていたのか、冴子はちょうど教室から出てくる安田優樹を捕まえる事に成功した。

「あの、何か用ですか？」
突然見知らぬ女性から声を掛けられて驚いたのか、少し戸惑いながら、しかし丁寧な言葉遣いで返事をしてきた。
「あ、ごめんなさい、私二年の葛木冴子って言うの。安田君、少し時間をもらえるかしら？」
安田は冴子の申し出に少し考える様子を見せたが、返事はＯＫだった。
「じゃ、ちょっと屋上に良いかしら？」
「ええ、良いですよ」
安田の返事は爽やかさがあって、冴子は少し、年下を見直しても良いかとさえ思った。
一年生の教室は四階にあり、屋上へは五階へ昇ってから、さらに屋上へと上がる階段を登らなければならない。冴子は先に立って安田を屋上へと案内した。

「あの、ちょっと色々と話がしてみたくって……」
「え？あの俺とですか？」
「迷惑だったかな」
「いえ、そんな事は無いです」

安田は手でいえいえとやると、少し恥ずかしそうにしていた。
写真よりも良い笑顔じゃない――――冴子はそんな安田の表情に、どこかホッとするモノを感じる事が出来た。

「そう言えば安田君、今は一人暮らしなんですってね」
冴子はまず、当たり障りの無い話題から話をする事にした。
「ええ、良く知ってますね。親しい人しか知らないハズなんですけど……」
「ああ、いえね、私の知り合いであなたの事を知っている人がいるのよ。それより、一人暮らしって大変じゃない？特に男の子だから食事とか洗濯とか」
冴子は曖昧に答えたが、これ以上深く追求される前に、こちらからドンドンと話し掛ける事にした。
「いえ、昔から妹と二人って事が多かったから、それ程大変じゃないです。あ、でも食事は大変になりました。食事は妹の担当だったんですけど、今年全寮制の中学校へ編入してしまったんで、今度は自分で作らなくちゃいけないんですよ　……それで、もっぱらレトルトのお世話になってます」
安田は最初の緊張した表情がとれたが、あくまでも初対面の人への礼儀をわきまえた丁寧な言葉だった。冴子が先輩だという事もあるのだろうが、それよりも安田が元々持っている礼儀正しさからだと思われる。

「妹さんは可愛いでしょう」
冴子はきっと、この安田が妹の事を大事にしているのでは無いかと思った。どうして？と聞かれれば説明に困るが、何となく人の良さそうな、優しさが感じられる表情からそう思った。
「あやめって言うんですけど、もう生意気でしょうがないですよ」
安田は困ったような表情をしていたが、その中にも家族への愛情が窺えた。

さて、そろそろ……少しうち解けてきた所で肝心の話をしなくては———冴子は今回の目的の事を思い出して質問を切り出した。
「ところで、妙な質問するけど、安田君は今、付き合ってる娘とかいるの？」
「ええ！？いや、あの、いませんよ付き合ってる人なんか。女の子にモテた事ないんです」
安田は恥ずかしそうに質問に答えたが、冴子にはそうは思えなかった。
少し話をしただけだが、安田という後輩からは清潔感や内に持つ優しさという物が感じられ、女の子にはモテそうな雰囲気を持っている。
今回だって智美のリストに挙がったくらいだから、潜在的に人気は高い方だろう。外見だって普通だし、何より———性格が良い。
冴子自身、短い間だったがこの安田と話をしていて好感が持てた。

そう、誰かとよく似ている———冴子は漠然としたイメージが浮かんでいた。
「誰だろう……良く知っている人の様な気がする」
冴子はその人物を思索した。そして該当する人物が浮かび上がった時、不思議と懐かしい思いにかられた。
そうか、裕太とそっくりなんだ———頭の中に浮かんだのは幼馴染みの顔だった。
いつも自分の隣にいてくれて、何かをすれば「仕方がないな」……と笑ってくれていた。そんな優しい笹倉裕太の顔だった。

「先輩？」
少しの間、冴子が何かを思いだしているかのように動きを止めていたので、安田が心配そうに顔をのぞき込んでいた。
「あ、ご、ごめんなさい。ちょっと、思い出したことがあったから……」

そんな安田の優しさが嬉しかったが、冴子の頭の中には裕太の影が消えて無くなることはなかった。それよりもむしろ、安田の優しそうな顔を見ると、裕太の影が次第に大きさを増す。
でも……でもどうしようも無いじゃない！！――――冴子はそんな思考を振り払うかのように頭を振った。
「ごめんなさい話の途中で……そう、優樹君はモテそうな感じだけど」
「え？からかうのは止めてくださいよ。ボクなんていつも女子からかわれてばかりなんですから」
「ふふ……そう言う事にしておきましょう」
「本当ですよ」
「でも、好きな人はいるみたいね」
「え？……はい」
安田は否定しなかった。案外こういう時にその人の思いの強さが出るものだ。
話の流れや、恥ずかしいと言う理由から、好きな人はいない――――と、嘘を付いてしまう人もいるが、どうやら安田の気持ちは本物のようだ。

「その娘って――――」
どんな娘なの？と聞こうとしたが、冴子はそれを止めた。安田の事だ、きっと相手も良い娘に違いない。この短い話の中でも、安田の事が手に取る程伝わってくる。
とても誠実で、人の心の痛みを感じられる男の子に違いない、と。
そしてそんな安田が選んだのだ、話を聞くまでもなく、相手の女の子も素敵な娘なのだろう。

「ごめんなさい。随分時間を取ってしまったわね」
「あの、話しって」
「ううん、もう良いの……ごめんなさい。ありがとう」

冴子はそれだけ言うと、先に安田に帰ってもらった。

私は一体、何をやっているのだろうか――――屋上に張り巡らされているフェンスに寄りかかる冴子の瞳には、少しだけ、光る何かがこぼれ落ちていた。

大団円：あなたはキスの力を…信じますか？

――最終日――

その日の朝、目覚まし時計が鳴ることは無かった。
遅れる様なら学校は休もう――冴子は昨晩、そう思ってアラームをセットしなかったのである。

今日は神が定めた期限の最終日であった。
が、しかし、冴子には分かっていた。自分が期限の内にキスできないこと ――そしてそれは、生き返れないことだと言うことも……
冴子はそんな状態の中で学校へ行き、いつもと同じように振る舞えるか分からなかった。友人の顔を見て、自分が平静を保っていられるか自信が無かったのだ。
だから目覚ましはセットしなかった。もし翌日、起きるのが遅れたならば、学校は休むつもりだったからである。
しかし、長年の習慣か……冴子はいつもと変わらぬ時間に目覚めていた。

「取り敢えず……学校へは行くか」

どうしようか――冴子は起きてからも少し悩んだが、昨日寝る前に時間どおりに起きられたら学校へ行くと決めていた。普段と変わらぬ行動をとっていた方が、逆に気分が紛れるかも知れない。
いつものように朝食をとり、いつものように身だしなみを整える――朝の時間程に性格に過ぎていくものはない。気が付けば、いつもと同じ家を出る時間になっていた。

冴子は玄関で靴を掃き終えると、これが最後の「行って来ます」になるのだろうか――と言う考えが頭の中によぎる。

「行って来ます」

すると、キッチンで洗い物をしていた母親から返事が返ってきた。

「いってらっしゃい――あ、冴子、今日お母さん達は出掛けるから、夜は何か適当にお弁当でも買って食べてね」

「分かったわ」

そうか、もしかしたらお母さんに会うのもこれが最後なのかも知れない――　冴子は別れの予感と共にドアを開け、学校への一歩を踏み出すのだった。

「おっす冴子」

「おはよう冴子」

冴子が教室に入ると、智美と昌代の二人がいつもと変わらない挨拶を交わしてきた。

「うん、おはよう」

冴子は二人に返事を返すと、会話には入らずに、そのまま自分の席へと腰を降ろす。教室を見渡すと、いつものように雑多な会話でにぎわっていた。

自分も、いつもと変わらない風景の一人だったのにね――冴子に、不意に寂しいと言った感情がこみ上げて来た。

今までならば冴子も雑多な会話を楽しむ内の一人だった。授業が始まる前、昨日見たドラマの内容や音楽の事、ちょっとした愚痴から放課後は何をしようかなど……喧噪の中の一人であることが当たり前だったのだ。

しかし明日には、自分がこの風景の中から欠けてしまう事を知っていた。

きっと、私がいなくなったら智美と昌代は悲しんでくれるだろう……けれども、一ヶ月が経ち、半年が経ち、一年が経った頃、いないことが当たり前の風景になり、ついには思い出してくれる事も希になるのだ……それが日常の中で暮らすと言う事なのだから。

仕方が無いとは思いつつも、冴子は急激に寂しさがこみ上げて来るのをどうすることも出来なかった。

自分が日常の中から抜け落ちてしまう事、そしてついには、友人達の記憶の中からも抜け落ちてしまうこと――冴子の中で、その事が処理しきれなくなって行く。

もちろん、キスをすれば助かるのだが、冴子には、それを実行する気が無くなっていた。

何事も前向きに考えて行動的な冴子だったが、昨日、安田優樹という後輩と会って自分の取ってきた行動を振り返る事が出来た。

自分は本当の心を偽っている卑怯者だ――冴子は痛切に感じていた。

いくら生き返る為とは言え、本当に好きでもない相手を彼氏にしようとした。そう、いわば相手の事を体よく利用しようとしたのである。

ある意味、バレー部の山本健介と俊文の方が、よっぽど誇らしい存在なのではないだろうか……安田の様に、好きな人を好きと言える方がどんな結果になろうとも大事なのではないだろうか――その思いが、冴子の中で渦巻いているのである。

そして最終日の今日、キスの相手を捜すのを止めた。それがどんな結果になるのか分かっていながら冴子は止めざるを得なかった。

自分が本当の気持ちを隠したまま、利用する為だけに相手を探す事が間違っていると気が付いたからである。

しかし、だからと言って、自分の存在が消えてしまう事を消化した訳では無かった。いや、むしろそれは、冴子の中でドンドンと大きくなり、どうしようもない恐怖感へと変わっている。

それもそうだろう、冴子はごく平凡な17才の女子高生なのである。17才と言えば、恋も勉強も、いわば人生が始まったばかりの輝きのある年齢だ。死というものと一番無縁な存在なのだ、消化出来るハズがない。

自分が日常の中から消え失せてしまう――その事実を思うと、冴子はどうしようもない恐怖によって押しつぶされそうな感覚に陥っていく。

……そして

ダメ、やっぱり私には耐えきれない！――冴子は、喧噪の中の教室から、はじかれたように逃げ出すのであった。

「お、おい！冴子！！」

冴子の様子がどこかおかしい――そう思っていた知美と昌代の二人は、突然教室から外へ掛けだした冴子をみてただごとでは無いと感じた。

とは言えこれから授業も始まる。

詳しい理由が分からない今、二人は、どうして良いか判断が付かなかった。

「どうしよう智美」

「冴子のヤツは自分一人で悩んじまうからな……そっとしておいた方が良いのかも知れないけど――」

「そうだ、一応裕太君に連絡しておこうよ」
「うん？ああそうだな。裕太なら何か知っているかも知れない」
二人はとりあえず、滝島裕太へ連絡することを思いついた。

トゥトルルルル……

何度かの呼び出し音の後、相手が電話に出た。
「ハイ、滝島ですけど――――」
実はこの電話、間一髪で繋がったと言っても良い。裕太は電車で30分程の高校へ通っているのだが、いつもならこの時間には既に校舎の中に入って携帯の電源を落としているハズであった。
しかし今日に限って裕太は寝坊してしまい、今はまだ駅のホームを出たばかりで携帯の電源が入っていたのである。

「あ、萩原ですけど……裕太君？」
「おお昌代か、久しぶり。どうしたの？こんな時間に……」
裕太と冴子、そして智美と昌代は中学時代からの友達だったが、最近連絡を取っていなかった事もあって懐かし思いが先に立った。しかし、今はそんな悠長な事を考えている場合ではない。
昌代は挨拶もそこそこに、教室での出来事を説明した。

え？冴子が学校から抜け出した？！――――裕太が驚きの声をあげる。

裕太の知る限り、冴子が学校をさぼるなどとは考えられなかったからである　……しかも、教室の中から逃げるように駆け出すなど、何か余程の理由があるとしか思えなかった。
「それ、本当なのか？」と、思わず疑いの声を上げた。
「本当よ。ここ最近、冴子の様子がおかしかったから心配してたんだけど……裕太君は何か心あたりない？冴子がどうして悩んでいた

のか」
昌代は、裕太ならば何か知っているのではないかと思って聞いた。
本当は私、死んでるの……そして、生き返る為にはどうしてもキスが必要なのよ――
裕太の頭の中に、あの日の冴子がよみがえってきた。
「いや、まさかな……」
しかし、裕太はそれを素直に信じることは出来なかった。
それもそうだろう、自分が死神の人違いによって命を奪われ、神様と会い、交渉の末にキスさえ出来れば生き返る事が出来る様になったなど――信じろと言う方が間違っている。
けれども――裕太は、あの時の冴子の表情も思い出していた。
アイツは真剣だった。少なくとも、アイツは嘘を言うようなヤツでも無いし、夢の中の事を現実と間違える様な夢想家でもない。そんな冴子が、真剣な眼差しで言っていた……アレは、本当の事だったのだろうか？
いや、やはりアレをそのまま信じろって言うのが無理だ、何か他の理由があるに違いない――裕太は頭を振って、その考えを振り払おうとした。
「冴子がどうして悩んでいたのかは分からない。だけど、昌代の方は何か心当たりがないのか？」
「ううん、私達にも分からないわ。ただ、さっきも言ったように、最近の冴子の態度がおかしな事が多かったから……」
一週間くらい前からだよな――
直ぐ隣にいるのか、智美が昌代に言った言葉が携帯越しに聞こえる。

一週間？一週間前と言えばあの日とちょうど重なるな……

「一週間くらい前からって、何かそれらしいことでもあったのか？」

「それらしいって言うか」

ほら、やっぱりアレだよ、死んだように眠ってた、あの日――――

昌代の携帯に耳を近づけて聞いていた智美が、それに答えた。

「死んだように！？」

「わっ、び、ビックリした！」

それは、思わず携帯を落としそうになる程の大きな声だった。

「あ、悪い……でもさ、その死んだようにってどういう事？詳しく話してくれよ」

裕太の真剣そのものの声に驚きながら、昌代はあの日の事を思い出した。

「……それで、お昼に一回起こそうとしたんだけど、まるで死んでるみたいに動かなくて、息すらしてないんじゃないかな？って思えるくらいに熟睡してたの。だから起こさなかったんだけど、考えてみるとあの日からおかしかったのかも。結局放課後には目が覚めたんだけど、その直後、誰もいない方へ向かってしゃべってたり……そうよ、やっぱりあの日からおかしかったんだわ。急に彼氏を作るんだ！って意気込んだのも、それからだったし……」

あの話しは本当の事だったんだ！――――昌代の話しを聞きいて裕太は漸く確信する事が出来た。

久しぶりに会ったあの日、夢物語だとばかり思っていた話を、裕太は信じる事が出来たのである。

そうだ……あの時言っていた最終期限日というのは、確か今日のハズじゃないのか？

もしあの話しが本当ならば……イヤ、もうここで疑ってしょうがない。だとすると冴子は、今日中にキスしなければ死んでしまう！？
――裕太はその事実に気が付いた。

「そんな……馬鹿な」
冴子が死んでしまうなど考えられなかった。意地っ張りで見栄っ張りで、考えるより、取り敢えずやることを決めてドンドンと前に進んでいく……そんな元気の固まりな冴子が、この世から居なくなってしまうなど考えられ無かった。
違うのよ！これは作り話なんかじゃ無くて――
あの時の、冴子のセリフと必死の表情が浮かんできた。
冴子が一番最初に助けを求めてきたのに、俺は……俺はどうして信じてやれなかったんだ！！
「昌代、俺探してくるよ。そして冴子を絶対に救ってやる！！」
裕太はそう言って携帯を切ると、流れに逆らって、今出たばかりの駅の改札を再び戻るのだった。

――夕刻――

あれから裕太は一端家に帰る事にした。もしかしたら、冴子が自分の家に帰っているかも知れないと思ったからだ。
しかし、家族も全員出かけているのか、チャイムを鳴らしてもむなしく鳴り響くばかりで返事は帰ってこない。
とにかく早く見つけなくては――裕太は悪い想像を追い払うかのように、冴子の行きそうな場所を手当たり次第に探す事に切り替えた。
しばらくすると、授業が終わったのか、智美と昌代の二人から電話があり、冴子を見つけたら直ぐに連絡をくれと言い残して、高校

近辺での捜索はそちらに頼み、自分は、自宅周辺やその昔よく行っていた場所を中心に当たり出した。
母校の小学校から始まり、中学校、桜の花見をした川べりにも行ってみたし、その他、思いつく限りの思い出のある場所へ走り回った。

今までこれ程走り続けられた事は無かったかも知れない――――裕太は時計を確認すると、探し始めてから既に何時間も経過していた……が、それでも冴子は見つからなかった。
思いつく限りの場所を探し回ったつもりだが、そこに、冴子の姿を見つける事が出来なかったのである。すれ違ってしまったのかも知れないと、もう一度家に戻ってみたがやはり居ない。
そうこうしている内にも、周囲がだんだんと暗くなってくる。
智美達からの電話でも、まだ冴子を見つけられていないという話で、裕太は次第に焦りの気持ちで一杯になってきた。

「一体……どこに居るんだよ冴子」
裕太は、どうしてあの時もっと真剣に話を聞いてやらなかったのかと悔やんだ。
もしあの時、冴子の言うことを本気で信じてあげたなら、アイツはこんなに苦しまずに済んだのに――――悔やんでも仕方がないとは分かっていたが、裕太はいたたまれない気持ちになった。
あの、突拍子もない話を信じろと言う方が無理かも知れなかったが、裕太にしてみれば、幼馴染みである冴子の必死の訴えをもう少しまじめに聞いてやれば良かったと思えるのである。

そして裕太は、もう一つの感情に気が付いていた。
意地っ張りで見栄っ張りで、いつも突っ走っている様な冴子だけれど、俺は失いたく無い。いやそれ以上に、俺はそんな冴子の事が

好きなんだ！！
裕太は冴子を失ってしまいそうになってから気が付いた。
いつも側に居たから気が付かなかった。性別の無い時代からつき合っていたから気が付かなかった？

違う！！

自分は知っていたはずだ。冴子の事が好きだと言うことを……
ただ、それを認めるのが怖かった。
もしそれを認め、その気持ちを冴子に伝えたら、自分達の関係が壊れてしまうのでは無いか———そんな思いが怖かったのだ。
もし、冴子が俺の事を何とも思っていなかったら……もし、自分の事を受け入れてくれなかったら……それが怖かった。

だけれども、裕太は気が付いてしまった。
いつも自分で突っ走り、前向きに考えては笑っている冴子の事が、愛おしくてたまらない事を……そして、それを失いたくないという事も。
裕太の頭の中に、冴子の元気に笑っている姿があった。

そうだよ———絶対に死なせてなるものか！！

裕太は冴子を捜し回る内に、自分の気持ちに気が付いていたのである。
いや、元々二人は、お互いにその気持ちに気が付いていた。だが、あまりにも近すぎる存在だったために、改めてそれを確かめるのが怖かったのだ。
それが今回、冴子を失ってしまうかも知れないと言う事になり、その気持ちを素直に認められた。
そして、それを認めた瞬間、裕太は冴子の事が愛おしくてしょう

がなくなったのである。

「ちくしょう！どこに居るんだよ冴子」

夕闇に包まれてゆく街の中、裕太はもう一度初めの場所から探し始めようと走り始めるのであった。

そして……

いた———冴子だ！！

裕太は小さな公園のブランコに座っている冴子を見つけた。

既に夜の八時を回り、空には星が輝きだした時だった。冴子は肩を落とし、ジッと身動きもせずに足下を見つめ続けながらブランコに座っていたのである……　それはまるで、近寄ることすらためらわれる程の、魂が抜けてしまったかのような痛々しい姿だった。

「探したよ……冴子」

声を掛けたら消えて無くなってしまうのではないか？と言う思いに駆られながらも、裕太は冴子に声を掛けていた。

冴子を苦しみの中から救うためにも、そして、自らの気持ちを伝える為にも声を掛けなくてはならなかった。

「冴子……」

裕太はもう一度声を掛けた。冴子は声の主が裕太だと気が付いていたが、それでも顔を上げようとしなかった。

それどころか、全く動く気配が無かったので、既に冴子が死んでしまったのでは？と思える程に心配になった程である。

……が、しばらくの沈黙の後、顔は下げたままだったが冴子から返事が返ってきた。

「どうしたのよ、裕太」

いつもの元気な姿はなく、声も弱々しい

裕太はそんな冴子の姿を見ると、苦しみや悲しみの大きさがひしと伝わって来る様で心が痛かった。

俺が冴子を救ってやらなくては――――裕太は気圧されそうになる心を奮い立たせる。

「冴子、ごめん。冴子が話してくれたこと、信じてやれなくて悪かった」

「……」

「俺に助けを求めてきてくれたのに、冴子がどんなに苦しんでいるのかも気がつかなくって……俺は冴子の事を救ってやれなかった」

「違う……」

――――え？

「違うの。裕太は何も悪くない」

「いや、もっと真面目に聞いてたら、冴子はここまで苦しまなくても良かったハズだ」

「違うわ！あんな話し、逆の立場だったら私だって信じていなかった。裕太は悪くなんか無い」

悪いのは――――素直になれなかった自分の方なのよ……

冴子は顔を上げて、ボロボロとこぼれる涙を拭こうともせずに裕太の瞳を見つめながら言った。

「私が素直になれなかったのがいけないのよ」

そうなのだ、私があの時、自分の本当の気持ちを打ち明けていれば良かったのだ。素直になれず、意地を張って他の男を利用しようとしたのがいけなかったのだ……苦しんだのは決して裕太のせいなどではなく、自分自身が悪かったのだ。

冴子は涙が止まらなかった。

「冴子」

裕太は、初めて見る冴子の泣き顔に心が締め付けられる様に痛かった。そして同時に、冴子を救ってやりたい――――と、心の底から思うのである。

「冴子……俺は」

裕太は自分の中にある本当の気持ちを打ち明けようと、冴子の肩に手を掛けようとした――――その時、冴子はそれを恐れるかのように身を翻した。

「ダメ！私は……私は裕太に助けてもらえるような人間じゃないの」

そう言うと冴子は、はじかれたように公園から逃げ出した。

「おい！冴子！！」

俺はお前を失いたくないんだ――――裕太は心の中でそう叫びながら、冴子の後を追った。

「待ってくれ冴子！！」

裕太は冴子の背中に大声で呼びかけたが、冴子は走るのを止めようとしなかったので差が縮まらない。そればかりか、今までずっと走り回っていたぶん、足に力が入らずにドンドンと差を付けられてしまう。

裕太は力の限りに追いかけたが、ついに、大きな交差点で車の流れに阻まれてしまった。

チクショウ！！

「冴子――――！！」

裕太は、行き交う車と車の間で、冴子の姿が消えて行くのをどうすることもなく見送るしかなかった。

「どうすれば……どうすれば良いんだよ」
冴子を見失いどうして良いか途方に暮れたその時、裕太は急に背後から声を掛けられた。
「葛木君は……」
「え？」
振り返ると、そこには冴子の学校と同じ制服の少女が立っていた。
「葛木君は今日の9時、自分の家の屋根に登るハズだよ……」
その少女は、裕太が聞きたいことを見透かすかのように言った。
「ど、どうしてその事を！？」
裕太は突然現れた少女の言葉に驚きが大きかった。
どうして自分が冴子を探している事を知っているのか？どうして冴子が屋根の上に登るのか、理由が分からなかった。
そんな裕太の疑問に気が付いたのか、その少女は訳を話し始めた。
「偶然……冴子君についていた死神氏から話を聞いてね、ほら、これがその死神なんだけど」
その少女とは――――御影石（みかげいし）　斎（いつき）だった。
斎はまたもや竹田の首根っこを捕まえて、裕太の方へとつきだして見せた。
「い、いや……俺には見えないんだ……けど、でもその話は本当なのか？冴子が夜の9時に屋根の上に登るって」
「間違い無いよ。この死神氏に聞いたところ、夜の9時に、屋根の上に迎えに行くと言っている」
斎はそう言うと、もう一度竹田をつきだして見せたのだが、やはり裕太にはその姿が見えない。
しかし、裕太に取ってそんな事はどうでも良かった。目の前に現れた少女が嘘を付く必要もないし、死神の事を知っていると言うことは、彼女にはそのたぐいのモノが見えると言うことで、それだけで十分信頼できる。
それに、冴子が走っていった方角も考えてみれば自宅の方向だった。見失ってしまった今、どんな些細な事でもそれを信じるしか無

い――――裕太はそう思うと、居ても立っても居られなかった。

「ありがとう！」

裕太はそれだけ言うと、自宅へ向かって走り出したのである。

……

「あの～それでは私も、そろそろ行かなくてはいけないので……その～離してもらえませんか？」

竹田は冴子の事が心配で公園の近くをうろうろしていたのだが、その時、またもや斎に捕まっていた。そして、今夜の事を洗いざらい説明させられたあげく、相変わらず首根っこを掴まれて居たのである。

「ふむ……君が働くところを一度見てみたかったけど、仕方がない。冴子君の命には替えられないからね」

「ははは……」

竹田は斎がどこまで本気で言っているのか判断に困ったが、手を離してくれたので取り敢えず一安心。

「あの～それでは私、あの二人を追わなくてはいけないので～」

それでは失礼します――――竹田は急いでその場を後にするのだった。

謎の少女の言葉を信じて走ってきた裕太は、冴子の家の前までくると、呼吸も整わないままにチャイムを押した。

ピンポン――――

ピンポン――――

二度繰り返してみたが返事がない。
今日は何回か家に来てみたし電話もしていたが、誰も出なかったところを見ると、他の家族は出掛けている様子だった。
裕太は冴子の両親が、たまに外で外食をして夜が遅くなるのを知っている。
これでは冴子が帰ってきたのかどうかも分からない。
しかし『夜の九時に屋根の上に迎えが来る』と言う、あの少女の言葉を信じるなら、九時にあと十分というこの時間に帰ってきていない訳がない。
裕太が念のためと思って玄関ドアに手を掛けると、鍵が掛かっていなかったのかスッと開く――――とそこに、冴子の靴を見つけた。

帰ってきてる――――

最悪、自分の家からでも冴子の家の屋根に登れるのだが、そんな時間も惜しい。裕太はそれを発見した時、ホッと、息を吐いて胸をなで下ろしたが、ここで安心しては居られない、あと十分で冴子に迎えが来てしまうのだ。それまでに何とか冴子とキスをしなくては――――と思うと、
「冴子！居るんだろ、入るぞ！！」
少々強引だと思ったが、この際そんな事は言ってられない。勝手に家に上がり込むと、まずは二階にある冴子の部屋へと向かった。

「冴子入るぞ！」
裕太は一応声を掛けてからドアを開けた……が、しかし、二階の部屋には居なかった。すると、既に屋根の上に居るのかも知れない。
裕太は屋根の上に出るために、さらに階段を登った。

「冴子……」
屋根の上に出ると、そこに冴子は座っていた。
顔を伏せているのは泣いているからだろうか――――裕太は冴子の方へと近づいて見たが、やはり小刻みに肩が震えていた。
「冴子、頼むからこっちを向いてくれよ」
「ダメよ……お願い、私を一人にしておいてよ」
冴子は顔を伏せたまま、弱々しく言った。
「何を言ってるんだよ冴子。お前はこのまま、このままあの世へ逝っても良いって言うのかよ」
「私には助かる資格なんて無いの。裕太に助けてもらう資格なんて無いのよ」
「なんだよそれ、そんな勝手なこと言うなよ……冴子に資格がないなんて誰が決めたんだよ……そんな資格なんて関係ない」
裕太はそこで一呼吸入れた。
「俺は冴子の事が――――冴子の事が好きなんだ！」
夜も更け、完全に周囲は闇の中に包まれている中、近所の事などお構いなしに二人の男女は屋根の上で大声を張り上げて言い合った。
「やめて……お願いやめて」
冴子はそう言って耳をふさいだが、裕太は躊躇しなかった。強引にその手をどけると冴子の顔を自分の方へ向けた。
「冴子があれからどんな風に過ごしたのかは知らない。だけど、そんな事は関係ないんだよ。俺はこれからだって冴子の笑顔を見ていたいんだ！」
「……」
「冴子が意地っ張りだって事や、見栄っ張りな事だって知ってるさ。だけど、俺はそんなお前のことが好きなんだ！！」

「裕太」
「だから俺は、今から冴子にキスをする。例え冴子に嫌われても、俺は冴子を……　愛してる」
「ゆ、裕太ぁ……」

裕太の真剣な眼差しに、冴子の心の鎖が解き放たれて――――そして、二つの影がゆっくりと一つに重なっていった……

……

……

…

「やれやれ、冷や冷やものでしたよ神様」
二人が熱い口づけを交わしている時、少し離れた場所に二人の男の姿があった。
死神の竹田泰三と、東京地区を預かる神様である。

「な～に、大丈夫です。あの二人ならきっとこうなると思っていましたからね……　ボクは心配なんかしてなかったですよ」
「って、そりゃそうですよ。何せ神様は人の未来が『見える』んですから。初めからこの場面を知っていたんでしょ？」
「確かにボクは、人の未来を見通す事が出来ますよ。だけど……今回に限っては冴子君の未来は見ていませんからね」
竹田の質問に、神はとぼけ顔だった。
「ええ！！ちょ、ちょっと待って下さいよ。じゃ、冴子さんがキスできなかったらどうしたんですか！？　あの、本当にあの世へご招待するつもりだったんですか？」
「大丈夫。何せ神が信じたことだよ、当たらない訳がない」

「は？……はぁ～」
竹田はいたずら好きの神に、やれやれと言った表情でため息を付くしかなかった。

「それにしても、いつまでキスしてるんでしょうねあの二人は……」
「まあまあ、良いじゃないですか、放っておきなさい。微笑ましいではありませんか」
恋愛も司る神は、二人の姿を眺めながら楽しそうに笑った。と思ったら、不意に何かを思いだしたかのような表情になる。

「あ～それはそうと竹田君」
「はい～なんでしょう？神様」
「君の証人としての仕事が終わったのは良いとして、何か一つ、忘れている事はありませんか？」
そんな神の質問に、竹田は全くと言って良い程思いつく事が無かった。
「えっと……何かありましたっけ？」
「忘れたんですか？　１０７才の、本物の桂木冴子さんをお連れする事を」

―――あっ！

その瞬間、全ての事を思い出した。
元々あの世へ連れて行くハズの、１０７才の方の桂木冴子の事を忘れていたのである。
そんな竹田は「忘れてました！」と言うや否や、急いでその場を後にするのであった。

「今度は間違えないでくださいよ」
神はそんな竹田の背中に声を掛けると、やれやれ―――と、先程

の竹田のようにため息を付いた。
「さて、そろそろ私も戻りますか」
そうそう神が留守にする訳にもいきませんからね……神はそう思いながらも、もう一度冴子達の方へ視線を向けた。
「うらやましいものです」
神は未だキスし続ける冴子達をうらやましそうな顔で見つめると、満天の星々が輝く夜空へと帰っていくのだった。

大団円：あなたはキスの力を…信じますか？（後書き）

序破急を目指して書き始めた短編が、いつの間にか起承転結……イヤ、起転転結（トラブルばっかり）と言う中編物に近い内容になってしまいました。

これは某検索エンジンのコンテストに応募しようと書き始めたのですが、締め切りに間に合わず、ストックしておこうかなぁ～と思っていたのですが、冴子達があまりにも出せ出せ！とうるさかったのでお目見えしたと言うものです。

ところで皆さん、ラブコメって好きですか？

ＡＴＳは好きなんですけど、どうにも恥ずかしくて苦手です……ええ苦手なんです。でも、なんだかんだ言いながら、好きなんですよね～なんて言うか、悲壮感の介在しない設定って、ラブコメの特権みたいな物じゃないですか。

不幸物小説って苦手なんですよ。ドロドロとした人間関係の中で、苛められる主人公（犬飼ってて、金をくれ！とか、どっかの料理屋さんを舞台にした嫁姑戦争ものとか）が登場するの。アレダメなんです。

その点ラブコメって下手をすれば「ラブ」と「コメディー」だけでも成り立つジャンルじゃ無いですか。書いていても読んでいても、楽しめるんです。

何度も書いていますが――――全ての登場人物に幸せを――――が、ＡＴＳが作る物語の基礎なんです。

確かに、物語の演出には欠かせない「怒り」「憎しみ」「恐怖」ｅｔｃなどは必要です。でも、最終的には、全ての登場人物にちょっとした幸せを与えてあげたい。
そしてそれが出来るのが、作者の特権なんですね。

さて、今回の「屋根恋」どうでしたでしょうか？
ハッキリ言ってヒロインの冴子はお気に入りのキャラクターです。
意地っ張りで見栄っ張り。考えるよりは行動する方が早いし、ドンドンと前向きに突っ走って行く性格の彼女は、ラブコメのヒロインとしてうってつけです。

物語としては「短編」としての「勢い」を大切にしたのですが、少し裕太との絡みが少なくなってしまいました。まあ冴子の行動だけで「コメディー」と言う点では大丈夫だとは思いますが、もう少し「ラブ」の点を出しても良かったかな　……と、ちょっと反省。
ですが、何はともあれ、短いながらも完結する事が出来て良かったです。

最後に――――この作品を読んでくれた全ての方に感謝します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4666d/

屋根の上の恋人たち

2010年10月8日13時33分発行